
遊戯王～デュエルキングを目指す少女の物語

魔法使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王「デュエルキングを目指す少女の物語

【Nコード】

N4494X

【作者名】

魔法使い

【あらすじ】

女はデュエルキングになれないことを知った少女は男装して学園に乗り込む。主人公はさまざまな危険を乗り越えてデュエル部に入る。日常？青春？ホモ？レズ？なんでもありのほのぼの系小説です。

ブローロロロロロローグ（前書き）

適当に思いついたネタ
頑張るよん

ブooooooooooooo

そして季節は長い冬を終えて4月の10日。僕はこれから始まる
うとする学園生活の為の準備をしていた。

「よいしょっと…」

入学のしたくを終えると僕は独り言のようにつぶやきながら玄関
に並べてある靴に手を掛けた。ちよつと寂しいけど今日で僕のふる
さとともお別れだ。僕はある思いを胸にして家を走るように飛び出
した。

僕の将来の夢は武藤遊戯、遊城十代、不動遊星のような誰もが尊
敬できるようなデュエルキングになることだ。

デュエルキングの道は果てしない。それでも長い道のりを超える
ことができた人がなれるのがこのデュエルキングだ。周りに無謀だ
と言われてもいい。それでも僕は大切な人に約束をしたんだ。それ
に僕は一度も約束を破ったことはない。絶対にデュエルキングにな
ってやる！

「さよなら…」

家の前に立つてお辞儀をした。これでこの家とはお別れだ。家族も皆ここには暮らしていないしこの家はそのうちなくなってしまうだろう。そして家から数歩歩いた時に何かに気が付いた。

「あー！下着忘れてるー！」

僕は急いで家に帰ると一目散にタンスから女性用のブラを取り出す。それを男性用のデュエルアカデミアの制服の自分の胸にあわせてみた。何かが変だ。

「そつえば私…。男の子なんだ…。もうこんなの必要ないのかな…」

私の名前は奈々川ナナ。女の子なのだ。それなのに男装をしているのはなぜかって？これを話すのは深い理由がある。でも私が女だっていうことが絶対にこれから始まる学園生活ではいけない。

「確か1ヶ月前に買ったこのブラウスってお気に入りに入るんだよねえ！まだ時間あるからちょっとだけ着てみようつと。最後だからいいよねー！」

じつくりと大きな鏡を見て着替えた姿を全身がはつきりと写るようしながらポーズを決めた。

「うーん。それにしてもまた胸が大きくなった気がする…」

自分の胸を触りながらその膨らみを鏡で見ながら考える。女を象徴するこの胸をどう隠すかが問題だ。膨らんでいることが少しでも見られると一瞬で女だということがばれる。

「まだ時間あるよなあ…。まだお気に入りの洋服いっぱいから順番に着よう」と

女はデュエルキングになれたという前例がない。かつてデュエルで栄光になった人物全ては男だった。女でもデュエルは強い人はいるが大人になるに連れてデュエルに離れていく。そもそも世間は女だからという理由で忘れられる。だから私は女を捨てて男になったんだ。これなら夢をかなえられることができる。この方法ならデュエルキングになれるかもしれない。

「うわあああああああああああああ」

やばいから私は走る。今日は大切な日だっていうのに遅刻する。今日が最後の女性でいられる日だと思つてのんびり着替えしまくつてたからだ。やばいぞこれ。

「セーフ！セーフだよね！」

試験会場に付くと先生が立っていた。私は焦りながらも自分が大丈夫だということを証明させるように努力する。

「ギリギリセーフだよ。あと3分遅れてたら危なかったな」

「やったー！私、開始早々遅刻するっていう目立つ子にはならなくてよかったー」

「それは良かった。良かった」

先生も嬉しそうな顔で私を歓迎の言葉で励ましてくれた。私は目をキラキラさせながら会話をさらに進めていく。調子に乗って興奮した私は早速言われてはいけない過ちを侵してしまう。

「よかったあ…。私、ゆっくり着替えしててちょっと油断してたのよね」

「君、受験番号と名前言ってなかったね」

「私、学生番号202番。奈々川ユウタ」

先生はポカッと穴が開いたような顔をしている。学生番号を私は言っただけなのに先生は驚いたような表情でこちらを見ている。何事だと私は思った。

「あれ、名前…？君、女の子じゃないのか？」

衝撃だった。いきなりばれてしまったのか？私という言葉を連呼するだけで男になろうと努力しているのにはれるなんて。

「ち、違う。僕、ネクタイの結び方にちょっとだけ苦戦してて練習していただけなんだ。こうやって…こうやるのができないんだよな

あ……」

急いで同世代の高校生が言いそうな台詞を私は作った。こんなところでこれから始まる私の学園生活が終わるなんて考えられない。私は男なんだ。

「……。わざわざ確認を取るまでもなくこの写真で登録してある通りだから男だよな。なんか君、私って言ったから一瞬女の子かと思っただよ。それにしても君、女の子みたいで可愛いな」

「勘違いしないでくださいよ。僕が女に見えるなんて先生は変体じゃないんですか！」

「すまん。最近他の先生にお前はシヨタコンだろって言われてるから勘違いされないように気をつけな」とな

やばい……。危なかったけどギリギリセーフだった。それにしても一人称を間違えるだけでも女の子っぽく見られてしまうのか？今は周りにいるのは先生で良かったものの学校ではちょっとしたことが命取りになりそうだな。

「おっと。そろそろ時間のようだな。会場に入らないと間に合わないぞ」

「先生が僕に無駄話するからでしょ！」

「すまんすまん」

あのシヨタコン先生が教えてもらった通りに会場に進んでいくと500人を超える生徒達が座っている。自分の席に座って少し立つと試験の先生が来て筆記の説明が始まった。これから始まるのはクラス分けのための筆記試験だ。もちろん私はデュエルキングになる

ためだからこんな簡単な問題に負けるわけにはいかない。それに何のために今まで勉強していたんだ。

第1話 『モテモテの学園生活』

私が女の子だっていうことがバレたらデュエルキングになるという夢がかなえられなくなってしまう。絶対にバレルわけにはいかない。学校でもなるべく無口で目立たないようにしよう。

「それでは次に新生学生代表による挨拶です！1年A組。奈々川ユウタ君！！」

どうやら私の成績は1年生の中でトップらしく新入生代表に選ばれてしまったらしい。そこで私は代表の挨拶をすることになったのだが私が歩くと今まで静かだった体育館が急にざわめきの声になってしまう。

「これって試験が一位の人が挨拶をするんでしょ？」

「あの子美少年じゃない？これがうわさのイケメン？」

周りの学生達による私語が私の耳に聞こえる。目立たないと宣言したはずなのにこんな結果になってしまったてすごい恥ずかしい。私はこんなことが起きるなんて予想外だった。

入学式が終えて自分の席に座る。なんか周りがざわついていても私のほうを向いているようだ。なぜか私のことで周りとは会話をしているみたいだった。特にたくさん女性の視線が目立つ。

「すごいねー！。あんな綺麗な顔をした男の子なんか見たことない」

「ちよつと加奈子。声かけてきなさいよ」

「やだよー。恥ずかしいったらー！。そっちこそ声を掛けなさいよー」

「無理よ！絶対に無理だつて！」

「くそつー！顔がいいからつて女の子にモテモテかよ！ふざけやがつてー！」

「神様は不幸だよなあ。なんで同じ男なのにこんなに天と地の差が激しいんだ」

男の格好をしているだけなのにこんなに女の子にもてるなんて…。でもあまり嬉しくないんだが。

これからどうしたらいいんだろう。私はなぜかクラス中の注目になっちゃったし…。やっぱこれから男の友達も作らないといけないのかな？どうしよう私…。男の子すごい苦手なのに。

「なあ。奈々川つてどんなデツキを使うのか？」

「……。え？」

急に男の人に話しかけられた。ちよつとびっくりしたので戸惑っ

ている。

「だからどんなデッキを使うのかなって？何か奈々川ってこの辺で見ない人だからさ」

私が普通に女の格好をしているときでも男の子にあまりしゃべりかけて貰うという機会がないからちょっとだけ緊張する。

「なるほどね。奈々川は電車で2時間も掛かるところから来ているのか。何でわざわざこの高校に来たんだ？」

「そう…。デュエルが強い高校だって聞いたからここにやってきたんだ」

それでも男の人達は私に大してやさしく接してくれた。

「やっぱり筆記試験強い奴はデュエルも強いのかよ…」

「僕はデュエルだけは自信があるんだ。誰にも負けない自信がある。将来の夢はデュエルキングになることなんだ」

「何かすごい奴と友達になれそうだな。俺の名は宮城ケン。何かある都道県と間違えられそうだから宮崎でもケンでも苗字が名前のどちらかを呼んでくれると嬉しい」

良かった。私、なんだか男の人と仲良くできてる。良かった良かった。こんなところで仲良くできるなんて。どうやら皆言い人そうで安心できそうだな。

「ちょっと僕、トイレに行きたいから行ってくるね！」

「じゃあ俺も一緒に行くぜ！」

「ええ……！？」

何で…トイレに行くだけなのについてくるの？もしかして男の人
って一緒にするものなの？女の子同士でも行くっていうこと自体あ
まりないっていうのに。

「奈々川がトイレに行くってさ！」

「本当に…！」

「俺も付いてくるぜ…！」

「何でそんなについてくるの…！」

ただおしっこをするっていうだけに私の跡を廊下で男達が4人
ほどついてくる。何かすごい緊張する。私はゆっくり歩きながらト
イレに向かおうと左に曲がった。

「おい……。奈々川…。そこは女子トイレだぞ…」

「お前……。まさか……」

そうだ…。私はもう男なんだった。忘れてたよ。だとしたら男子
トイレを使えっていうのか！！嫌な予感がする。まさかばれる…？

「ごめん。ちょっと前見てなかった」

「嘘つくなよ。お前、一直線で女子トイレに入ろうとしてたぞ」

注意されて私は生まれて初めて男子トイレというものに入った。
入ってすぐに見たくないものが見えた。男子が立って便器にくっつ
くような距離でシューっという音と共に何かを出している。これが
男の人の……。

「どうしたんだ？奈々川…！」

やばい…。私が変わったということがわかる。私がばれないように

するという選択肢はただ一つ。ここに逃げるしかないのだ。

「おい！見るよ！あの奈々川が個室に入ったぞ」

「どうやら天才でもお腹が痛くなるみたいだな」

「ハハハハハ。ウンコは家でして来いよ！！馬鹿じゃねえの！！」

どうして…。私はトイレにいったただけなのに……。男なんて嫌いだ。

「神崎ミ力だ！！」

「あの人って何なんですか？」

「か、神崎ってあの現役プロリーグの…」

「確か先月、プロのリーグ戦で2位だったらしいな」

「ってか…。テレビで見るより可愛いな」

私がトイレから出ると今度はすごい人が廊下を歩いている。容姿は完璧でかなり美人っていう分類に入る完璧人間だ。この子はデュエルは強くて僕が目指しているデュエルキングにはなれない。理由は女性の力では無理だからだ。それでも私はこの子は尊敬する。だって私が目指すべきライバルだもの。

「サインもらえるかな？俺の妹が君のファンみたいでほしがっているみたいなんだ」

男の集団のうちの一人が前に出てきて神崎さんの前に現れる。

「あつ。ずるいぞ！！あいつ。抜けやがったな！」

「はあ……」

神崎さんがため息をはく。どうやら呆れ顔で断りを入れて説明をしたようだ。

「これで家族をダシにして私に持ちかけてくる人はこれでちょうど50人目……。ごめんね」

「ギクッ……」

「校長先生にこれからずっと学園にいるんだからサインはしないようにって言われているの。それにね。いいものを見つけちゃったから……」

「いいものって……」

断られた男子はショックで少し石像のように止まった。どうやらどうでもいい一般人には神崎さんの目には入らないみたいだ。

「そういえばここにいてのって奈々川ユウタくんだね」

「そ、そうだけど」

「顔と頭がいいだけで神崎のほうから離しかけてもらえるのかよ！
！ちくしょー」

私はなぜか断られた男の子とは違って話しかけてきた。

「君、この学校って進学校の癖にトップの成績ってすごいねー」
「……………」

褒められたけど私は言葉はでなかった。

「まあ、私が特特生じゃなかったら君は2位だったんでしょうけどねー！うふふふ……。ついに見つけた！私と釣り合いそうな男子」

「私、あなたとお付き合いしてあげる」
「いや、結構だ」

「！？」
「即断した！しかも今の回答一秒も掛かってなかったぞ！」

どうしよう…。私、初めて告白されたよ。しかも女の人にとって…。私は女なのに。

「これは一体どういうことなの？」

神崎さんはすごく戸惑っている。私の判断はしょうがないのにすごい落ち込んでいるみたいだ。

「あ、『結構だ』。だと肯定の意味になるからわかりずらかったか？ だったら『お断りするよ』」

私がとどめを指すと神崎さんはさらに静まり返った。

「なんと…。あの神崎ミカを悪徳セールス扱いにしやがった！」

でもあまりにもかわいそうだったので

「でも、友達でいいなら喜んで！」

と言ってあげると、

「あなた…。私が…誰だかわかっているの？ 今まで私が…何百人の人の告白を断ったと思ってるの？ …」

そんなことを言われても…。しょうがないものはしょうがないのに。

「その私がようやく好みの男の子を見つけたのに…。自分から声を掛けたのに…。自分から声を掛けるなんて人生で初めてのことなんだからね！ こんな屈辱初めてよ」

何かすごいかわいそうになってきた。私がもし、好きな男の人ができて断られたらこんな悔しい思いになっちゃうのかな。

「でも、覚えておきなさい！ 私、あきらめないから！ 覚えておきなさいよ」

神崎さんはそのまま私に振られてどっかに行ってしまった。ちょ

つと緊張したけどこれでよかったのかな？でも可哀想だったからあとで謝った方がいいのかな？

「すごいな！！お前！！なかなかやるじゃないか！」

「あの神崎ミカを振るなんてそう簡単にできるもんじゃないぜ！！」

「ちょ…。ちよつと…」

私の周りに男の人がいっぱい囲む。なぜかは知らないが10人くらいで胴上げされた。そして私のことは一日にして神崎ミカを振ったということで学校中の有名になってしまったようだ。

そして体育の時間。私は男子の中に混じってバスケットをするので、女の私は男の力には勝てないと思ったのだがそんなことはなかった。私は中学生のころバスケット部だったのでむしろ得意の分類だ。いつも以上に体が軽いようでスムーズに仲間とパスの連携が取れた。そして私は大きくジャンプすると華麗にダンクが決まった…。

「きゃーーーーー。ユウタ様ーーーーー」

「きゃあああああああああああ」

「ユウタ様ーーーーー。かっこいい〜」

「ありえねえよ…。女子の奴、入学したばかりの奈々川をもつ『ユ

ウタ様』だぜ」

「だ、 Dankなんて初めてみたよ……」

たくさんの男子の嫉妬と女子の『きゃー』という声が聞こえる。

「はあ……」

私はため息を吐いた。私はこんなキャラじゃないのに。どうやら私はこのキャラを残りの3年間続けるとなるとかなり辛いプレッシャーになるだろう。私の性格からしてもっとドジっ子というキャラに本当はなりたかった。

「お前はいいよなあ……。ちらほら女子にされて。俺なんか一度もこんなにモテたことないぜ」

「僕はこんなキャラを演じるなんてコリゴリだよ。本当は普通の高校生になりたかったんだけどなあ」

本当は普通の女子高生になりたかったんだけど。可愛い制服を着て女の子同士でこうやって『きゃーきゃー』言う生活。でも諦めるしかない。私はデュエルキングになるんだ。こんなことでくじけるわけにはいかないんだ。

体育のあとは酷い目にあつた。

他のクラス含む20人の女子が私の裸を見たいと言って追いかけてきたのだ。一部の人はカメラを持っていてかなりの重症だと思った。

私に親切に助けてくれる男子はこの女の症状を腐った女と書いて腐女子というらしい。初めてこの言葉をした。

必死で私は女子の集団を逃げ切った。途中で靴を履き替えるべくために下駄箱を開くと大量の何かが雪崩のごとく出てきたのだ。

どうやらそれは私宛のラブレターだった。しかもそれは数え切れないような量。漫画やアニメで見たようなことが本当に現実で起こっているのだからびっくりしたけど。

靴を履き替えるともしものことがあると行けないので着替えを持ちながら体育館の裏側に面倒だけど態々着替えに行った。

「やっぱいちいちここで着替えないと行けないのか…。男子と一緒に着替えたら女つてことがばれそうで怖いよ…」

辺りをキョロキョロして周りをいないことを確かめると私は短パンを脱いだ。あの女子達のことだからどっかで隠れてそうで怖いけどこんな目立たないところに誰も来るわけない。

女だとバレないように胸を縮ませるコルセットがさっき運動したせいで汗で匂って変な感じだ。ベトベトしてるから脱ぎたいけど大変だからやめよう。

それにもしもの為にパンツもトランクスに変えるべきだけどスースーするから履けないんだよね…。

「えっ!?!」

突然誰かがここを歩いているような音がした。私の着替えが見られてはいけないうと急いで隠れようとするがすでに遅かった。

「あ、あなた…。どうして女性物の下着を履いてるの?」

「神崎……さん。何でここに……」

これで終わりだ。こんなにも早くばれてしまうなんて……。

第2話 『僕は変態だ』

「何で神崎さん…。ここにいろの？」

「私はあなたと同じように授業中、目立つのが嫌いだからたまたまここに隠れようとしただけよ。そっちこそ何してるのよ？」

体育館の裏。誰もいないと思っていたはずなのに早くも女性用の下着をしている私は神崎ミカにバレてしまったのだ。

誰にも絶対にこのことはバレてはいけないと用心していたはずなのにこんなにもあっさり見つかってしまうなんて…。

「あなたどうして女性物の下着を？」

呆れたのかびっくりしてるのか分からない表情で神崎さんはこちらを見ている。私のことが好きで告白していたのにショックだったんだろうな。

「…まさか…だと思うけど…。あなたって実は…」

これで終わりだ。諦めよう。私は目をつぶって後の台詞を聞き流してた。

「あなた…っでもしかして変体なの？」

「…はあ？」

ばれてないのか？でもマシだ。マシなんだ。問題ない。

ここで女ってバレるってことよりはるかに…。大丈夫だ！私、受け入れるんだ。上等じゃないか。

「ああ。僕は変体だ！！」

「……そう…。ユウタは女装が趣味だったんだ…」

すごい冷たそうな残念そうな表情をしている。

告白を振った相手が女装を趣味としているってことになってるけど女ってばれるよりはマシだ。このまま続けるぞ！

「僕は女装をするのが好きなんだ」

「あんた変態の癖に私を振ったんだ…」

よし。このまま攻めとおせばこの状況を打破できるぞ！！私が変なキャラになってもいい。

「…。すまない…」

そう思っただけで安心したそのときだった。

「あなた！私の奴隷決定ね！！」

「は、はあああ！？」

「決定いー！。決定ね！あなたはもう、私の言いなりなの」
「……」

「よろしくね！」

最悪だ。余計にひどいことになってる気がする。

「だってあなた。女装が趣味って私がばらしたら学校中に広まっちゃうのよ。あなただってばれるわけにはいかないでしょ」

「そうだけど…」

「だったらこれから私の言うことを聞きなさいね。女装の趣味を直すために、これからあなたは私の魅力を教えてあげるんだから！」

「……。別に女の魅力を教えるなくてもいい…」

「何でよ！！男の癖に女の子が好きじゃないっていうの！！じゃあ、ばらすわよ！！」

「そ、それだけはやめてくれ！」

「ならこれから私のことをミカって呼ぶのよ。私もあなたのことをユウタって呼ぶから」

広めるか広めないかは神崎さんに権限がある。最悪だけど彼女の言いなりになって諦めるしかない。

でも、この学校で羨まれている有名な人と付き合えるなんてちょっとだけ嬉しいかもしれない。でもこれ以上好きになるってことはないと思う。

あのミカの趣味も悪いっちゃ悪いんだけど。

「それにしてもユウタっておっぱいがちょっと膨らんでるんだね」

いきなり私のところに体重を掛けて不意をつくように私の胸を揉んできた。

振り払おうとしたがいきなりだったのでガードできずに変な声を出してしまった。

「きゃ…！」

「何、女みたいな声出してるのよ。これってやっぱ何か入ってるの？」

「ち、違うよ！君こそ変態じゃないか」

「あらあら。私に指図して言いと思っているのかい？私のスレイプちゃん」

「くっ…！」

これ以上彼女に何かをやっても無駄だと思った私は、いまさらだが下着を隠す急いでさっさと男性用の制服に着替えた。

私がネクタイを慣れた手つきで絞めながら彼女に訴えるためにミカにこう言った。

「なあ、そろそろ学校が終わるころだけど戻らなくていいのか？」

もう、6時間目の授業が終わって辺りは夕日が近い状況になっている。そろそろホームルームも終わって放課後の時間になるはずだ。これを理由に彼女に離れて貰おうとしたのだが彼女は私に離れようとしなない。

「へえー！。そんな適当な理由をつけて私と離れたいの？私、

ユウタの心読めるもん。ここから早く逃げたいんでしょ」

「君つてもしかして…」

心が読める…。まさかだとは思うが私が女だっていうこともばれてしまっているのか…。

そんなはずはないのに…。私は冷や汗でワイシャツがびっしょりになりそうなくらいに焦っているのがミカにはわかっていているようだ。

「なー！ーんていうのは嘘だよ。本当かと思った？」

「脅かすなよ…。びっくりしたじゃないか！」

「だってユウタが可愛いからちよつとからくりたかったただけだもん」

やっぱ嘘か。それでも私はちよつとびっくりしたな…。

「ねえ…。放課後。やることがないなら、今ここで私とデュエルしない？」

「…え…。デュエル？」

「やりたくないならやらなくてもいいわよ。あなたの学年1位の實力をちよつとだけ見たかっただけだから」

私はデュエルしたいに決まっている。だって目の前にいるのはプロデュエリストの神崎ミカ。

デュエルキングを目指している私には通過点のために戦いたい。それに私の今の實力も知りたいもの。

「ああ…。いいさ。受けて立つよ。僕は絶対に負けないからな!!」
「いいねー!。その威勢。こつちもやる気出てくるわ」

こんなところで絶対に負けるわけにはいかない。そう決意した私は着替え用のバッグと共に入れてあった場所からデュエルディスクを取り出す。

私は腕に装着して構えた。デュエルディスク…。これは未来の便利なデュエルをスムーズに処理してくれる端末機器だ。

これにカードをプレイすることで本物のが実態化するように見える楽しい機能なんだ。これがなしにデュエルするなんてことは考えられない。

「じゃあせつかくだから賭けをしましょうよ」

「ええ…!!」

対戦する準備ができて落ち着いているミカはいきなり衝撃的な発言をした。賭けって一体どんなことをするのよ…。

「簡単なことよ。ここには誰も来ない…。だからここで私達が起こしたことを内緒にするための駆け引きよ。…どう？面白いでしょ？」
「…。どうということなの…？」

疑問に思ったがすぐにユウナは話を進めていった…。

「忘れちゃったのかしら？…。あなたは見られたくないものを私に見せてしまった。ユウタは女装が趣味だったということが知られたくないでしょ！だったらあなたが勝ったらこのことを周りに内緒にしてあげる！」

「……。もう、忘れてくれよー！」

「でも、今だって女物の下着着てるでしょ。私が忘れるわけないじゃない」

「くっ…」

「そしてもう1つのルール。あなたが私に負けたら」

「あなたは私と付き合うつて約束してちょうだい！まだあきらめてないんだから」

「だから無理だ」

私は即断った。

彼女はまだ私のことを諦めてないようであるけど、私は何を言われようが無駄だ。

「何だよ！だつたらあなたの秘密をバラすわよ！！」
「…。何度も言う通りにやめてくれよ…」

私は女なんだ。それなのに同じ女と付き合うなんて…。絶対に無理だ…。ありえない。

それなのに負けたら付き合うつて…。私は百合に目覚めてしまうだろ。まだ私には乙女心っていうのがあるのに。

「……。そんなに負けるのが怖いのか？」

「ち…。違うー！！それに僕だけ不利な条件をつけるなんておかしい！こんなの無茶だよ」

神崎さんが私の弱みを探ろうとしているけど何か意味が違う。

「なら、もしユウタが負けたとしてもあなたの秘密は絶対にばらさない。だから約束してくれる？」

「…。わかった…。僕は負けない！」

お互いに了解して準備を済ます。お互いにデュエルディスクを向き合つて構えた。

ここで私がデュエルに勝つてしまえば彼女は私のことを諦めて貰えるだろうとこのときは思っていた。

第3話 『XセイバーVSライトロード』

『決闘!!』

ユウタ LP 4000

ミカ LP 4000

「先行はユウタからでいいわ。後攻はハンデだからこれで勝てば気持ちいいでしょ」

「随分と余裕なんだな」

舐められてるけど勝てる確立をわざわざ上げてくれたんだ。

先行は有利だ。初手でカードを1枚多くスタートできるから好きなんだよね。私。

「僕のターン！ドロー。僕は手札からモンスターをセット！カードを2枚伏せてターンを終了するよ」

私がセットしたモンスターは『XX-セイバー ダークソウル』。このカードが墓地に送られた時、デッキからXセイバーを持ってこれる。

まずは罠と一緒に伏せてミカの様子を見るのがこのプレイングは正しいだろうと判断した。

「ふーん。私に恐れをなしてガン伏せしただけなのね。マイスレイプ。じゃあ次は私のターン。今引いた『強欲で謙虚な壺』を発動

する」

「僕のことをスレイプって呼ぶのやめてくれよ」

ミカは手札をじっくりと睨みながら私に挑発してカードをプレイする。

今発動した『強欲で謙虚な壺』は大変貴重と言われながらプロリーグでも必須と呼ばれる高価なカードだ。

めくれたカードは『ソーラーエクステンジ』と『ライトロード・シーフ ライニャン』『サイクロン』……。

「私はこの中から『ソーラーエクステンジ』を手札に加える。そして『ライトロード・モンク エイリン』を召喚！」

ソリッドビジョンに現れたのは純粋な正義の色をした白い制服を来た猿のような顔をした少女のモンスター。

「まずは手調べにそのモンスターを潰してあげる。バトルよ！『エイリン』でセットモンスターに攻撃！！このカードの効果で戦闘を行ったモンスターはダメージ計算を行わずにデッキに戻る」
「くっ……」

作戦失敗だ。セットしてあった『ダークソウル』がデッキに戻されてしまったことで効果が発動できなくなってしまった。

それにもっと痛いことは墓地に送られなかったことなのでこのカードを蘇生で利用できないことが何よりも私は辛かった。

「カードを1枚伏せてターンを終了させるわ。エンドフェイズ時に『エイリン』の効果でデッキからカードを3枚墓地に送る」

「僕もエンドフェイズ時にカードを発動させるよ。『トウルース・リインフォース』！効果でデッキより『X-セイバー パシウル』

を特殊召喚するよ」

『トウルース・リインフォース』は発動したターン攻撃できないが相手ターンなので関係ない。

むしろデメリットを帳消ししたってことさ。『パシウル』は戦闘破壊されない効果を持つてるから時間稼ぎができるんだけど…。

「『パシウル』を守備で出したようだけど、『エイリン』の目の前には無力よ」

「違うな。僕はただ、壁として呼び出したわけではない。このカードはレベル2のチューナーってことに意味がある。僕のターン!!」

私が狙うのはただひとつさ。

ユウタ

LP：4000

手札：3枚 4枚

場：モンスター

『X-セイバー パシウル』

魔法・罫

セット1枚

ミカ

LP：4000

手札：4枚

場：モンスター

『ライトロード・モンク エイリン』

魔法・罨

セット1枚

「『XX-セイバー ボガーナイト』を通常召喚！このカードの効果により『XX-セイバー フラムナイト』を特殊召喚する」

私がカードをデュエルディスクに2枚を叩きつけると赤いマントを羽織った剣士に続けて金髪姿の小さな剣士が並んで姿を現す。

「次にレベル4の『ボガーナイト』にレベル2の『パシウル』をチューニング！！シンクロ召喚！疾風の剣でフィールドを駆け上げられ！！『XX-セイバー ヒュンレイ』！！」

2体のモンスターがレベルを表す星に変わり、その星が交差するように交わって強い光を発する。その強い光のあとに別のモンスターが出現する。

「『XX-セイバー ヒュンレイ』の効果により伏せカードを3枚まで破壊できる！僕は君のその伏せカードを破壊するよ」
「… なかなかやるわね」

『ヒュンレイ』が剣から波動を発生させると伏せカードは破壊される。効果で割ったカードは『聖なるバリア-ミラーフォース-』。あの神崎さんの表情を見るからにないカードを破壊したと解釈できるな。

「そしてバトルフェイズに『ヒュンレイ』で『エイリン』に攻撃！！」

『ヒュンレイ』が2つの剣を華麗に使って『エイリン』を粉碎させる。伏せがないから、から空きでいとも簡単に攻撃が通った。

ミカ LP 4000 3300

「そして『フラムナイト』でダイレクトアタック!!」

この攻撃も普通に通る。『トラゴエディア』ありそうな気がしたんだけど、この流れからしてなさそう。

ミカ LP 3300 2000

「僕はカードを1枚伏せてターン終了」

「ちょっとは楽しめそうね。私のターン!『ソーラーエクステンジ』を発動。手札から『ライトロード・ウォリアー ガロス』を墓地に送って2枚をドロ―。そしてデッキからカードを2枚落とすわ…」

前のターンに使わずに温存していたカードを使うと『ライトロード・ビースト ウォルフ』がデッキトップから落ちてしまう。

この綺麗な流れを狙ったようにこのターンで使いこなすとはプロのセンスといったところだろうか。

それに『ネクロガードナー』。1度だけ攻撃を無効にするカードもさっきの勢いで落ちたな。なんていう強運の持ち主なんだ…。

「ラッキー！！『ウォルフ』を特殊召喚！さらに『ライトロード・マジシャン ライラ』を召喚！！」

ソリッドビジョンにはライトロードの集団を表す白い服装をした正義の力を持った獣に続けて純粋な祈りをあげようとする女性が出現しようとする。

『ライラ』には守備にすることによって伏せカードを破壊する効果を持っている。だったら…。

「『セイバーホール』発動！Xセイバーがいる時、その召喚を無効にする！！」

これで1対1交換は成立したけど。

でも、神崎さんのことだから相手にうまく罠を回避されたような感じに見えるんだよな。これでこのターンは終わるわけではないし。

「その子は困ったんだけどね。うまく引つかかったみたいね。次は手札のカードを1枚捨てて『死者転生』を発動するよ」

「うまく僕の罠を回避したつもりか！」

『死者蘇生』に似た紋章のカードが発動される。手札のカードを捨てると、あるカードを回収させる。

このカードは伝説とも呼ばれたカード。過去に伝説のデュエリストの武藤遊戯が使ったとか使ってないとか世間では話題になっているけど真実はわからない。

「くっ…。このカード…。いつの間に…」

「じゃあ墓地の光と闇を除外してこのカードを特殊召喚する！『カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -』を特殊召喚よ！」

青と金の鎧を着けた光の戦士がこの緊迫したフィールドに現れる。
このカードの出現によって場の空気が一揆に重くなったように感じる。

「『ウォルフ』で『フラムナイト』にアタック！」

まず、手始めに正義の野獣が私のモンスターにタックルを仕掛けようとする。

この攻撃も私に効果を使わせる筈なんだけど、使わないよりは使ったほうがマシだ。

「『フラムナイト』の効果！フィールドに存在するとき、1度だけ効果を無効！」

「でもまだ攻撃は終わるわけではない。『カオス・ソルジャー』 - 開闢の使者 - 』で『フラムナイト』に攻撃！！開闢双破斬！！」

開闢の使者と名乗る戦士は剣を円を描くようにして回しながら金髪戦士を切り裂いた。

ユウタ LP 4000 2300

「さらに戦闘破壊したことにより、『開闢』の1つ目の効果発動！もう1度続けて攻撃できる。『ヒュンレイ』に攻撃」

私のモンスターが次々と消滅させられていく。
守りには自信があったはずなのに全て消されてしまった。カオスソルジャー……。とてつもなく強い……。

ユウタ LP2300 1600

「あらあら、そろそろ決着が付きそうね」

「まだ、僕のライフは0になったわけではないよ。僕はデュエルキングになるんだ。だからここで負けるわけにはいかない！だから、僕は君より強いってことを証明させてやるんだ！！」

「そのデュエルの姿勢は大事よ。よく覚えなさい」

私は負けたわけではない。プロとの戦いでこのピンチを味わえるなんてとても嬉しい。諦めるわけにはいかないんだ！

「これで私はこのままターンエンドする。ユウタ！かかってらっしゃい！」

「僕のターン！！いくよ！！」

私はデッキの上に手を掛ける。

あの打点3000のモンスターのプレッシャーがハンパないな。簡単に除去できそうな感じがしないが。それに確か除外効果も持っていたな。

私の手札の1枚。本日2枚目の『X-セイバー パシウル』。対ライトロードでは壁という本来の役割が使えずに時間稼ぎにもなりはしない。

でも、私の伏せカードとこのターンのドローの結果によってはまだワンチャンがあるから諦めない！！必ず勝てるから！！

ユウタ

LP：1600

手札：1枚 2枚

場：モンスター

なし

魔法・罫

伏せ1枚

ミカ

LP：2000

手札：2枚

場：モンスター

『カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -』

『ライトロード・ビースト ウォルフ』

魔法・罫

なし

「よし！！きた！！まずは『X・セイバー パシウル』を通常召喚！！さらに『ガドムズの緊急指令』発動！！」

私は前のターンに腐っていた1枚のカードを使うために準備していたのだ。

『緊急指令』は自分の場にXセイバーがいれば墓地のXセイバーを蘇生できるカード。大量展開が可能なカードだ。これならあのモンスターに勝てる布石ができる。

「また、めんどくさいカードがいっぱい出てきたわね…」

「『XX-セイバー フラムナイト』『XX-セイバー ヒュンレイ』を墓地から呼び出す。そして僕の場にXセイバーが2体以上存在するから『XX-セイバー フォルトロール』を特殊召喚!!」

新たに現れた自分の長身より大きな剣を持つ『フォルトロール』を中心にこれで私の場にはモンスターが全部で4体。

これから私の攻撃が始まるわけさ!!これで一気に攻めてやるんだから!

「そして『フォルトロール』には墓地のレベル4以下のXセイバーを蘇生する効果を持っている。僕は『ボガーナイト』を特殊召喚するよ」

一応、効果は知っていると思うが親切にカードの説明をする。私はさらなる展開をしようと心見たのだが、

「そうはさせないわ!!手札の『エフェクト・ヴェーラー』を墓地に送って1ターンだけそのモンスターの効果を無効にする!!」

これで展開は止まってしまったな。もっとモンスターを並べる予定だったのだが。

でも、プラス思考で考えると僕も神崎さんと同じく『エフェクト・ヴェーラー』を使わせたと考えるべきか。むしろ向こうは損しているわけだし。

「レベル6の『XX-セイバー エマーズブレイド』にレベル3の『XX-セイバー フラムナイト』をチューニングするよ。剣の主の王よ。我が元に降臨して巨大な剣を抜け!シンクロ召喚!現れる『XX-セイバー ガトムズ』」

光の先に現れたシンクロモンスターはXセイバーの総司令官と言ったモンスターだ。私の切り札でもあるカードである。

攻撃力はあの『ブルーアイズ』も超える3100だからな。私の場を荒らしつくしてきたモンスターなんか簡単にケチらせられる。

「厄介なモンスターを……」

「さらにレベル6の『Xセイバー ヒュンレイ』にレベル2の『Xセイバー パシウル』をチューニングして『ギガンテック・ファイター』を特殊召喚！このカードは墓地の戦士族1枚に付き攻撃力が100ポイントアップする」

私はシンクロを経由して大きな巨人のモンスターを呼び出す。打点勝ちをするために呼んだのだが、こんなところでこの効果を使えるとはな。

戦士族のカードは神崎さんの墓地には『エイリン』 『ネクガ』。私の墓地には『フラムナイト』 『パシウル』 『ヒュンレイ』が存在している。

よって5枚だから元々の攻撃力に500プラスして3300だ。

「バトルフェイズ！『ギガンテック・ファイター』で『カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -』に攻撃！！」

大きな巨体を生かして手のひらを広げるとそのまま伝説の戦士をいとも簡単に破壊するソリッドビジョンが映し出される。

ミカ LP2000 1700

「さらに『XXセイバー ガトムズ』で『ライトロード・ビース

ト ウォルフ』を攻撃する!!」

「これは止めないと辛い展開になりそうね。私は墓地の『ネクロ・ガードナー』を取り除いてその攻撃を無効にするわ」

大きな剣で正装服を着た獣のモンスターに切りかかろうとしたが、突然現れた幻影の戦士に阻まれて盾で攻撃を受け流されてしまった。伏せカードがないのに手札、墓地のカードを駆使して私の攻撃を防いだのはすさまじいな…。でも、さらに積み状態にしてやろうか。

「メインフェイズ2に入る。『XX-セイバー ガトムズ』の効果発動!フィールドのXセイバーをリリースすることで相手の手札をランダムに捨てることができる。僕は自身をリリースしてその唯一の手札を墓地に送らせてあげるよ」

「……。これでいいんでしょ」

何も弱い台詞を吐かずに手札を捨てる神崎さん。

捨てたカードは『ライトロード・エンジェル ケルビム』。ライトロードをリリースすることによって相手のカードを2枚破壊できるカードだ。

『ウォルフ』を残していたってことは次のターンのコストとして返されていただろう。随分と危なかったな。

「僕はこれでターンエンド宣言するよ。これで僕の勝ちは決定したな」

「私のターン!!」

黙々とカードを手札に加える。今まで有利だったのに神崎さんは一気に不利になったんだ。状況は変わりない。

さらに戦士が墓地に送られたことによって攻撃力3400になったモンスターが制圧するなんて普通のデッキでは返しが無理に近い状態なのにどうしてそんなに冷静なんだろう。

ユウタ

LP:1600

手札:0枚

場:モンスター

『ギガンティック・ファイター』 攻撃力3400

魔法・罫

なし

ミカ

LP:1700

手札:0枚 1枚

場:モンスター

『ライトロード・ビースト ウォルフ』

魔法・罫

なし

「どつやらここで終わりのようね」

「君は何を言っているんだい？手札1枚でこの状況を打破できる手段なんてありやしないよ」

手札のカードを見て急に表情が明るくなった神崎さん。

こんな状況で逆転されるなんてありえない。絶対にないと私は確信していたのだが、その幻想はすぐに壊されてしまった。

「ライトロードが墓地に4種類ある時、このカードは特殊召喚できる！『裁きの竜』を特殊召喚！！このカードはライフを1000払うことにより、このカード以外のフィールドのカードを全て破壊する。裁きの光！！」

「嘘でしょ……。こんなことって……」

ミカ LP 1700 700

神々しい髭を生やした竜がフィールドの中央で大きく雄たけびを上げるとフィールド上に稲妻が走った。

私の場の巨人のモンスターが吹き飛ばされていく。

ユウタ LP 1600 0

自分の付けているデュエルディスクのライフポイントの表示は0を示した。

「う…う…」

悔しさのあまり私の目には涙が浮かび上がりそうになった。

勝てる自信があったっていうのに…。くそ…。くそ…。何で…。負けてしまうんだ…。

「僕はデュエルキングになるっていうのに…。こんなところで…」

悔しい…。

「ユウター！何で、男の癖に泣いてるのよ！たかがデュエルで負けたくらいで…」

急に泣き出した私に心配したのか優しい心遣いで神崎さんは接してきたけど…。

泣いている私にはぜんぜんその表情に気が付かない。

「……。泣いてないよ……」

「おもいつきり泣いてるじゃないよ。ユウタ…」

「ち、違う…」

「いいからこれ渡すからさっさと泣き止みなさいよ。私が泣かしたみたいで誰かに見られたら恥ずかしいでしょ」

女の子らしいピンク色の『ハネクリボー』のキャラクターが描かれているハンカチを私に渡してくれた。

そうだ…。私は今は女の子じゃなくて男の子の格好をしているんだった…。こんなところでくじけるわけにはいかない。

『僕は男の子』なんだと自分に言い聞かせて、今は必死に涙を堪

えるべきだな。

「……。ありがとう」

「遠慮はいらないわ。でもあなた、デュエルキングって大きな夢があるあなたは尊敬するけど、そう簡単になれるものじゃないのよ」

「……。わかってるよ。このくらい」

大切な人と約束したこの夢。簡単じゃないってことくらい自分でも分かっている。でも、諦めきれないんだ。

「私だってプロリーグで挫折しそうになったことある……。自分の強さが突然無力だって感じちゃったからね。それでも私は堪えて自分なりに頑張ったから今の私がいるの。私のファンに何度も励まされてようやくこの道にたどり着くことができたもの。私だってユウタを応援するわ！だから頑張ってよ」

神崎さんに言われてようやく私の甘えだった性格に目を覚ました気がする。

「本当にありがとう……。僕、勇気が出てきたよ。それに君のおかげでこの学校での目標もできたんだ。あと、次デュエルするときは絶対に負けないから」

「べ、別にあんたのために励ましてあげたわけじゃないんだからね

！」

「……ミカ……」

この学校に来てから最初に久しくなれた嬉しさのあまり、私は初めて神崎さんの下の名前で呼んだ。

興奮したあまり無意識の内に自分の性別を忘れて神崎さんの胸に跳びついた。

「ユウタ…」

神崎さんの体から直接、体温を感じるよ。あつたかいなあ…。

「ちよつと待った〜！私との約束忘れてない！？」
「えっ！？」

神崎さんは抱きついていて私を切り離すように手で押し返すして体同士のくっつきから離れさせた。

そつえば何かデュエル前に賭け事をした気がしたけど。

「ユウタは負けたんだから今日からあなたは私の彼氏でしょ。よろしくね！！」

「…う…う…」

「さっきいきなり私に抱きついて来てエッチなこと考えてたんでしょ。何でそんな悲しそうな顔をするのよ」

「エッチなことなんて考えてないよ！誤解だ…」

「じゃあまずは始めに手を繋いで帰りましょうね。ユウタ」

手を繋いでこのまま学校の校門を出た。私達は有名人なもんだから周りの視線がみんなこっちを見ていて痛すぎる。

私は人生で初めて彼氏ではなくて彼女が出来た。なんかもう、いろいろと最悪だ。

第4話 『お尻の穴に注意』

私達は美人プロデュエリストの神崎と手を繋ぎながら歩いている。神崎さんとのデュエルに負けていいなりになってしまった私。

顔を真っ赤にしながら私は懸命にこの場を乗り切ろうとしているが、歩いていると周りの視線がものすごく辛い。

「…。神崎さん…。僕、すごく恥ずかしいよ…」

「カップルなんだから手を繋ぐなんてあたりまえでしょ。それと、もう付き合っているんだから私のことを呼び捨てで呼びなさいよ」

強気なテンションで私と向き合っている神崎さんは異常だ。っていうより、私はまだ認めてないぞ。

私は見た目は男の格好をしていてもまだ女の恋心ってもんがあるんだから異性では好きにはなれないな。

「だからってこんな目立つところで手を繋ぐなんてやだよ…」

私は想いのままに告げる。それでも神崎さんは諦めるということはない。

「もうここまで来たんだから私達は友達以上の関係でしょ！」

「僕はまだ君のことは異性としてはまだ好きになってない友達としては好きだけど…。これ以上学校で厄介なことになるのが嫌なんだ。それに、僕のクラスの人に見られたら面倒だし」

「だったら、あなたは学校で目立ちすぎていると厄介なことがあるなら、こうやって手を繋げば他の雌猫ストーカーにユウタを諦めさせることができるのよ」

「それでも大胆すぎるだろ！ー！これ」

手を繋ぐのは恥ずかしいけどよく考えれば、確かに神崎さんと付き合うのは利点なことはあるかもしれない。

私はこの学校に入学して1日目で目立ってしまったことにより、クラスの女子の王子様ポジションになってモテモテになってしまった。

体育の時間の着替えをしようと私の裸を確認しに来るほど変態な連中だったな。この状況が続くといつか私が女だっていうことがばれるかも。

でも、私が超有名人の神崎さんと付き合ってしまったえば私のことを諦めさせるということが出来る。

しかも神崎さんは優しいし、面白いから友達としては好きなんだよね。なんていうか、私の学園生活充実してきたぞ！！

「お、お前ら……」

「宮城……。こ、これは誤解なんだよ。僕が神崎さんの言いなりになっているわけ……」

「じゃあ、何で手なんか繋いでいるんだよ！！」

やっぱり目立つからすぐにクラスの人に見つかっちゃったか。

驚いた顔つきで私の最初の友達になってくれた宮城は私のことを見つめている。

「このリア充め……。奈々川……。お前……。神崎のことを振ったのに何で付き合っているんだよ。女にまったく興味ないお前は俺と同じようにずっと童貞だと信じていたのに……。俺のことを裏切ったな

……。宮城……。マイスレイプの意味違いすぎるだろ…。

「…。そんないきなり変なことはしないわよ。それより、まずあなたはスレイプの意味を辞書で調べたほうがいいわ」

「奈々川が神崎のことをレイプしたんじゃないかったのかよ…」

「まじめな僕がするわけないでしょ!!」

変なことを言っただけの場の空気をおかしくした宮城を見て神崎さんは呆れていた。スレイプとは奴隷って意味なんだけどもね。

この空気を変えて話の流れを作るために私は…。

「そういえば、今日から寮生活が始まるんだったよな。宮城…」

「奈々川も寮生活するのか…」

「ユウタ…。寮生活するの…？マイスレイプとして私の家に泊まるんじゃないかったの？」

「泊まるわけないだろ！！それに、その話は今聞いたよ」

私の家はこのデュエルが強い学校に進学するために離れたのだ。

だから寮生活も同時にスタートするってわけだな。

もう、私には家族はいないし、この学校にいる間の3年間も離れてしまうから取り壊して貰うことになったんだ。

だからこの鞆にはパンパンに私の私服などが入っているから準備はできているんだ。

それに、生まれて初めての寮生活ってどんなものか知りたいしね。

「俺、奈々川と同じ部屋になれるといいなー」

「同じ部屋って…？」

「あれ？2人で1つの部屋ってこと知らなかったのか？」

同じ部屋…？あれ？部屋は別々じゃなかったのか…。
やばい…。初めて聞いたよ…。部屋が共同ってことはいろいろと
不便じゃないか！！私の着替えはどうすればいいのよ。

「はあ…？私に喧嘩売ってるの？私のユウタはあげないわよ…！」
「俺が奈々川なんか狙うわけないだろ…！」

困るよ…。自分の部屋で安心して着替えができないってことにな
るとトイレで隠れてやるしかないじゃないのかな？
でも、何とかかなりそうなのかな……。寝てる間とか誤魔化そうと
すればいけるじゃないか！大丈夫だ！私、いける！

「奈々川。思い出したのだが人数の関係で2年生と同じ部屋になる
可能性もあるんだ」

「それがどうしたの？」

宮城は今まで嫉妬していたはずの表情だったのに急に怖そうな表
情に変わった。

何かあるのだろうかとは私は疑問に思った。別に2年生の先輩と一
緒でも私にはあまり変わらない気がするんだが。

「さっき聞いたうわさだけだな。2年生の堀内シリヤっていう先輩
に気をつけるってさ」

「…。なんだそれ！？」

変な名前の先輩だなと思ったが、どんなうわさ話かと軽い気持ち
で私は受け流した。

「その堀内シリヤさんはゲイらしいんだ」

「ゲイ？何それ？」

「夜中には気に入った男は腕力で物を言わせて掘りまくる変態に変わるらしい。これで今まで線の細い生徒がこの寮生活で何人も犠牲になっているらしいんだ」

宮城が恐ろしい顔で話していたが掘るって何のことなんだか…。犠牲になって話してるから危ない人なのか…。その堀内先輩って人は…。

「それがどうかしたのかい？」

「奈々川は女つばい顔だし、リアルファイト弱そうに見えるから掘られないように気をつけるよ。一応忠告したぜ」

「すまないが掘るってどういう意味なの？」

「はあ…。お前、こんなのも分からないのかよ。…。しょうがねえなあ…。教えてやるよ」

宮城は私に対して威張っているけど、そっちもさっきスレイプっていう単語の意味が分からなかったんだけどね。

「掘るっていうことはな！男のケツに男のチンコをぶっ刺すってことだよ！！」

私は卑劣な言葉を言われてしばらく声がでなかった。そんな変なことをされるわけないだろうとこのときは自分に暗示していたのだ

けど。

「僕がそんな危険な人と一緒に部屋なんて確立的にありえないだろ…。変な話を話さないでくれよ」

「俺はこれでもまじめに言っているんだぜ。あとで寮の担当の先生に自分の部屋から教えてもらえよ」

「恐ろしい話を私のユウタに話さないでよ！！こんな最低な奴と私のユウタが一緒に部屋になるわけないでしょ」

少し同様してるけど、大丈夫だ。

堀内先輩と同じ部屋にはなるはずがない。夜中に襲われてしまったら私が女だっていることがばれてしまうからな。

「面白い話だったから話ただけだよ。奈々川、お尻の穴を狙われないように気をつけろよ。じゃあな…！」

私はあれから宮城と神崎さんと別れた。

宮城が言っていたお尻を狙われるという怖い話でちょっとだけ恐怖心が残っていたけど、ありえないと私は確信していた。

堀内先輩が私の部屋と同じなはずないと自信持って自分の寮に移動し、私の部屋の扉をゆっくりと開けた。

扉を開けると大きなスポーツ体系の男性が私を迎えていた。この人が私と1年間一緒に部屋ということになる。

「…。やあ。君が奈々川ユウタ君かい？」
「そうですけど…」

怖かったので薄い声で返事を返す。だってこの人の第一印象としてすごい毛むくじやらないだ。

ワイシャツから見せているかのように見える胸毛が野獣のライオンっぽい。っていうかかなり怖い…。生理的に無理だ。

「私の名前は堀内シリヤっていうんだよ。ま、これからずっと同じ部屋だからよろしくな！」

嘘でしょ……。私は驚きを隠せなかった。悲鳴を上げたいと思ったが初対面の人にこんなことを言うのは不適切だ。

この男が宮城が言っていた危険人物の堀内先輩だなんて…。

「どうした？ 顔色悪いぞ」

詳しいことを聞いてもらっただけこの堀内先輩は男の人が好きらしいんだ。私は今、男の格好をしているから…。危険ってもんじゃない。

「まあ、入寮したてでわからないことがあると思うが、気軽に私に聞きたまえよ。たとえば私の好みとか…」

「いいえ…。一切興味ありません」

とりあえずは下手にフラグを立てる会話をしては駄目だ。

私はまったく先輩に興味を示さないように冷たい視線で送れば大丈夫なはず。そう甘く考えていた私は馬鹿だった。

「ちなみに私の好きなのは…」

「君みたいな可愛い男の子」

「ちっ…。会って早々いきなり告ってしまったぜ…」

先輩は額を赤く染めながら告白した。何かもういろいろと大変なことになってる。

こんな最低な奴と１年間一緒に部屋なんて死んでも無理だよ…。逃げられるはずもないじゃないか。

「君と私はこれから毎日毎日毎日毎日一緒に暮らすのだから仲良くしようじゃないか。君のような可愛い男の子とこんな狭い部屋でお互いに匂いを嗅ぎながら１年も暮らせるなんて…。まるで夢のようだよ」

乙女のような台詞を吐きながら私のことを考えずにぼかっとしてる。私、いろいろと人生詰んでる…。

「おっといかな。時間を忘れるところだったよ。奈々川君。そろそろ１年のお風呂の時間になる頃だ。君も入ってきたらどうだ？この続きはあとでしょうよ」

お、お風呂って……。

この寮には男性しか集まっていない。女性寮は男が入って来れないようにここから反対の数キロ離れている場所にあるらしいんだ。だから、普段男として生活する私はこの男子風呂しか入る道しかないってことになる…。

それでも変な人と言われないように私は近くまでやってきた。でも…。男の人と一緒に入るなんて無理だよ……。

「おっ…！奈々川じゃないか！お前も風呂に入りに来たのか？」

私、本当に付いてないよ…。よりによってなんで宮城が来るんだよ。

しかも宮城が現れた勢いで私は止まっていた足が動いているし…。確実に風呂に向かっている…。

「聞いてなかったが、お前は誰と一緒にの寮になった…？まさか堀内先輩ってわけないよな」

宮城が冗談で言っていたつもりだったんだけど、実際はその通りなんだよな…。

私は正直に話した。もちろん開始早々狙われているってことを伝えた。

「ハハハ。笑えるぜ。本当に堀内先輩と一緒にいるんだってな。聞いた先輩達の話によると堀内先輩の被害にあった子は鬱病に掛かって学校を辞めちゃったらしいぜ」

「……。僕、警察に訴えて来るよ……」

私にはデュエルキングになるという夢があるのにこんな恐怖で夢を壊されたくない。

それなのに何でこんなことで人生詰み掛かっているんだろう。やっぱり誰かに助けを呼ぶしかないのか。

「無駄だぜ。奈々川。男は女と違って訴えられるっていうのは滅多にないんだよ」

宮城が言ったこの台詞……。ここに来て異性の不便を感じてしまうなんて……。私が今、女の格好をしていたら確実に訴えられたのに……

「でも、お前には神崎っていう彼女がいるんだよな。素直に付き合っている人がいるって言えば諦めさせてもらえるかもしれないぜ」

話の途中だが、遂に青い男性をあらわすマークの場所に付いてしまった。

宮城がお風呂場の扉を開けるとたくさんの人が見える。それもみんな裸で男らしいゴツイ体つきの人ばかり。

私は体がフリーズしてしまった。こんな場所で私が裸を見せれば女だっていうことを隠し通すことなんて確実に無理だろ。

「どうしたんだよ。奈々川！早く閉めないと開けっ放しで寒いだろ」

宮城は平然として私の立場を考えずにゆっくりとベルト、ズボンと順に脱いできるとトランクスひとつになった。

「きゃあああああーーーーー」

そして私は宮城が最後の1枚のパンツを脱いだあとに見えた男の人の大きな物を見た瞬間、悲鳴を上げて無意識の内に逃げていた。風呂なんて絶対に入れないと確信した瞬間だった。

「お帰り。早く帰ってきたけど、ちゃんと私のために体を温めてきたのかい？」

私はこのまま自分の寮に戻ってきた。

堀内先輩が私を待ち望んでいたかのように歓迎していたけど、いつ襲われるかと考えると油断はできない。

ここにも私の居場所というものはない。

それにお風呂に入らなかったから、忙しい学校生活1日の溜まった私の体が汗臭くて変な感じがする。

これからずっと私はお風呂に入れないのかと考えてしまうというマイナスなことしか考えられない。

「もう、今日は疲れたから僕は寝ることにするよ。おやすみ…」

もう、やけくそになった私は寝ることにした。

この問題はとりあえず明日考えようと思って自分のベッドに登っ

て目を閉じた。

これから私のこの学園生活はどうなるのだろうかとずっと私は考える…。

私がデュエルキングになるっていったから女を捨てて男になったのに、不便すぎてもう嫌だよ…。

でも、大切な人との約束を守るために諦めてはいけないから、弱音を吐いてはいけない。

お風呂の問題は、朝早く誰もいない時間に速やかに入ってすぐに終わらせれば大丈夫なはずさ。

あと、彼女になった神崎さんと、今私と一緒に部屋の堀内さんに不意を付かれて女だってことをバレないように常に気をつけないとこんな生活やっていけるのかな…？

「もう眠りに着いたかい？奈々川君！？」

「！？」

急に部屋を真っ暗にし始めて堀内先輩の声が聞こえた。周りが静かになったのを確認した先輩はありえない行動を起こした。

それは、私の寝ているベッドの階段を上ってきたのだ。いきなりのことだったのでとっさの判断ができなかった私。

先輩は動きが遅い私を熊が襲うかのように急に、私の口を押さえ付けた。

「んっ」

「はあ…はあ…。暴れても無駄だぞ。君との体格差を考えろよ。私は柔道で全国7位の実力がある。それに全国デュエル大会でも4位の成績を持っているんだよ」

大声を出そうとしても口を封じられた私は声を出すことすら許されない。抵抗できない私は涙が溢れることしかできなかった。

しかも私の上に馬乗り乗っかってさらに追い詰めようとした…。絶望と最悪なことがこれから起きることしか予想できない。

「心配するな。今日はお前に気持ちよくなってもらっただけだ。不本意だが君が暴れると暴力で黙らせるしかない」

ゴツイ体で思いつ切りグーの態勢で私を脅した。

私の外見は男でも本当は女だから勝てるはずもない相手を見て怖いという感情しかない…。

「まずは泣いている可愛い君のパンツを脱がして可愛いお尻を拝見させて貰おう…はあはあ」

先輩が私のパジャマに手を掛けようとした。

このままでは私が女だっということがばれる最悪な結末になってしまう…。

私は涙を大量に浮かべながらこの絶対絶命のピンチの中、自分の昔の過去を思い出す。

第5話 『男としての勇気』

私はホモとうわさされている大柄男の堀内先輩と同じ寮になっていきなり襲われてしまった。

馬乗りにされて身動きができない私…。私のお尻を見ようとズボンを下ろそうとしてくる。女とばれるわけにはいかない私は何としても阻止をしなければならない。

口を押さえつけられていたけれども私は何とか振り払ってして小さい泣き声で言葉を発しようとした。

「……。僕は好きな人がいるんだぞ…。付き合っている人がいるのに先輩はどうして僕を襲うんだ…」

「はあ…。はあ…。付き合っても私は君のことが好きだよ。ハアハア。今から奈々川君を気持ちよくさせてその女の子より私のほうがいいってことを証明してあげよう」

「うう…。やめてくれよ…」

「叫んでも無駄だよ。みんなもう寝る時間だからね。大きな音を立てても今まで助けに来てくれる人なんていなかったんだ」

いくら暴れようとしてもしつかりと先輩の大きい体を駆使して私をホールドして動けなくさせられている。

「ホラホラ。私のアソコは君のおかげでこんなにも興奮しているんだよ…。今から君のお尻に入れてあげるね……。ハアハア」

「いやあ……………」

先輩のズボンの上からなのに股間部分が大きくなっているのがある。気持ち悪いよ……………。

まだ好きな人すらできていないのにこんな所で変なのを入れられ

るなんて死んでも嫌だ……。

男の人に恐怖を抱いてしまった私は、これ以上動いても無駄だと思った私は自然に抵抗する気力もなくなり素直に受け入れる態勢になっ

「そうだ……。これでいい」

思うがままに先輩にズボンを下ろされてしまう。そして神崎さんにも見られたものと同じ女性物の下着があらわになった。

「何で君は女物の下着をしているんだい？」

恐ろしさに言葉が出るはずもない。

「言わないとぶん殴るぞ!!」

「言います!! 言います……。だから殴らないで……」

怖いと思っても言わなければならない。本当の真実を言わなければならないに変なことをされてしまう。

「僕は実は女なんだ……。だからもうやめてくれよ……」

「ほう……。君は女の子なんだね!! 私

は女の子は本当は好きなんだけど、モテないから男の方が好きなんだよ」
終わった……。こんな形で人生を幕を閉じるなんて……。でもこれ以上なん

「女装が趣味なんて私の好みじゃないか！！ますます君のことを気に入ったよ…ハアハア」

「え…っ！？」

変態だ。キモイ。キモイ……。

こいつ…。確実に私のことを男だと信じきっている……。私がこのまま襲われてしまうなんて目に見えている。どうすればいい…。そうだったな…。私は今、男の子なんだ……。男の子だったらどうすればいいの？…。ユウタお兄ちゃんならこうするはずだ……！

「ぐわぁ…」

私の下着に見惚れながらボーっと油断していた先輩に私は股間に思いつきり足を上げて蹴り上げた。

いつもここに偶々当たると、お父さんとかお兄ちゃんが何で痛がるかわからなかったけどここが男の人の弱点っていうのがわかる。

そのまま先輩は2段ベッドの上から落ちた。叩きつけられる生々しい痛そうな音になった。

「ぐ…っ…うう…。馬鹿な…！」

お腹を抑えながら必死に苦しそうに倒れこむ先輩。

痛そうに殺すと訴え掛けているかのように目で私を見つめている

けど、今までの私の苦しみと比べればどうってこともないはずだ。
…。私は今、男だ！…。女の子みたいに泣き叫んで助けを呼ぶわけにはいかない。自分で解決しなければならんだ！！

「驚きましたか？ 僕は中学生の頃バスケット部のエースでダンクをよく決めていたから脚力と瞬発力には自信があるんですよ」

「うう……」

「一応、先輩はルームメイトだから仲良くなりたいたと最初は思っていました…。だからもうしないって約束してくれれば許してあげますよ」

これから1年間、先輩はここでずっと一緒になるんだ。

トラブルを起こさないように私に誓ってくればここでまともな1年間を暮らせる。だから先輩には私に襲わないと誓ってもらいたい。

「…。君の一撃は気持ちよかったなあ……。だから私はこの痛みが無くなったらあとで今度は君を襲うよ」

どうやら分かってもらえないみたいだな。

「せっかく忠告したのに…。そうじゃないなら先輩…。さっき言ってもわからないなら暴力でいって言っていましたよね…。だったら相手をしてあげますよ！」

本当は力で勝てないっていうのがわかっているはずなのに…。怖いってわかっている。

なのにここで弱気を吐けば確実にまた襲われてしまう。だからここで私の攻撃をやめるわけにはいかない。再びあいつの股間を蹴ってやる。

「ちょ、ちよつと待ってくれ…。私との体格差を考えると…。私は柔道で全国7位だぞ…。それに高校デュエル大会でも4位の成績を持っている…」

「そうやって僕に口で言っても無駄ですよ。わからないなら僕が黙らせてあげましょう」

私は思いつきりあいつの顔面を蹴ろうと構えたその時…

「わかった…。わかった…。落ち着いてくれ…。今は私は戦えないからデュエルで決着をつけようじゃないか！」

先輩は必死なのは顔でわかる。先輩は股間の激痛に走っているから今、リアルファイトで勝つことができるのは私だ。

だからデュエルで決着を付けるってわけだな。面白い……。私はデュエルキングになるからこんな最悪な野郎に負けるなんてありえない！！

「いいでしょう…。先輩を潰してあげますよ。これで勝ったら先輩はもう僕のことを襲わないって約束してくれますね！！」

「…。ハハハ。奈々川君は正直だな。私が全国4位のつわものだった、さつき親切に言ったのに忘れたのかい？ 私のアソコは痛くても決して負けることはないのだよ」

「試してみないとわからないさ…。それに今の僕は負ける気がしない！！！」

「決闘!!」

ユウタ LP4000

堀内 LP4000

「先行は僕から貰うよ」

「いいだろう。先輩が後輩を譲るのは基本はそうだからな」

先輩が格好付けてそう言っていたけれども、今の私の手札は神手札と自慢できるほどに強い。これなら負ける気がしない。

「まずは『X-セイバー エアベルン』を通常召喚!!」

召喚の掛け声と共に手始めに猫背気味のスタイルに爪型の武器のモンスターを出現させる。

このカードは戦闘ダメージを与えたら相手の手札をハンデスする効果を持っているけど、先行1ターン目だから関係ないか。

「さらに手札の『XX-セイバー フォルトロール』を墓地に送って『ワン・フォー・ワン』を発動。効果でレベル1のモンスターをデッキから特殊召喚できる。現れろ!『XX-セイバー レイジグラ』!」

私は爬虫類の顔をした獣戦士を呼び寄せる。

「ほう…。君のデッキはXセイバーデッキか…。奈々川君は可愛い顔をしてそんなデッキを使うんだな」

「さらに『レイジグラ』の効果により、今捨てた墓地の『フォルト

ロール』を手札に戻す。そして『フォルトロール』を特殊召喚！！」

Xセイバーが2体以上いるので私は2400打点のモンスターを呼び寄せる。このカードはXセイバーの展開を支える強力効果を持っているんだ。

「そして僕はレベル6の『XX-セイバー フォルトロール』にレベル3の『X-セイバー エアベルン』をチューニング！！」
「先行1ターン目にシンクロ召喚…。本当にそのプレイングは正しいのだろうかね？」

先輩は私に動揺させようとする作戦みたいにいやらしく言ったようだけど無駄だ。この展開はさらに進む！！

「剣の主の王よ。我が元に降臨して巨大な剣を抜け！シンクロ召喚！現れる『XX-セイバー ガトムズ』！！さらに2体目の『フォルトロール』を特殊召喚！！」

「なんだと…」

「『フォルトロール』の効果で墓地の『レイジグラ』を特殊召喚！さらに『レイジグラ』が特殊召喚に成功したことでもう1体の『フォルトロール』を墓地から手札に加えるよ。そして加えた『フォルトロール』も特殊召喚」

「モンスターが埋まった…。何をするつもりだ…」

手札の消費を4枚使ってフィールドを結構埋めた私。

例え『ブラックホール』を握られていたとしてもこれから見せるのは地獄だ。私を襲い掛かったことを後悔させてやる。

「『ガトムズ』の効果によりフィールドのXセイバーを墓地に送ることで相手の手札のカードをランダムに捨てさせることができる！

！『レイジグラ』をリリースして効果発動！！」
「…。私の『ブラックホール』が…」

やっぱり握っていたか『ブラックホール』…。これで怖いものはなくなっただけだな。

「さらにハンデスをしてやる！！効果使用済みの『フォルトロール』をリリースして『ガドムズ』の効果！！そして使っていないほうの『フォルトロール』の効果を使用して『レイジグラ』を蘇生！効果で再びもう1枚の『フォルトロール』を回収！再び『フォルトロール』を特殊召喚！」

「…。無限ハンデスループ…。私の手札が全て……」

無限ループを駆使して私はこの流れを繰り返して先輩の手札を全て吹き飛ばしてやった。これで相手の戦意は喪失してしまっただろう。

手札が0枚になったってことはこの状況はたとえ天才でも逆転することなんて不可能だ。

「私はカードを1枚伏せてターンエンド」

先輩の手札は0枚とはいえ、もしものことがあるかも知れないので念には念をリバーズカードを伏せて守りを固める。

ユウタ

LP：4000

手札：1枚

場：モンスター

XX - セイバー フォルトロール×2

XX - セイバー ガトムズ

XX - セイバー レイジグラ

魔法・罾

伏せ1枚

堀内

LP:4000

手札:0枚 1枚

場 : モンスタ―

なし

魔法・罾

なし

「よくも私の手札を全てなくしてくれたな……。私のターン！ドロー！！」

後攻1ターンで理不尽なターンが来て先輩はかなり焦っているみたい。

「私は手札の『深海のディーヴァ』を召喚！さらにデッキより『深海のディーヴァ』を特殊召喚！！」

先輩はチューナーとチューナーを並べるといって謎プレイングをしてくる。

このままではシンクロ召喚はできないというのにどうしてなのか？私を感じたことはこれではない別の召喚方法か。

「『深海のディーヴァ』でオーバーレイネットワークを構築！！エ

クシース召喚！」

2体の同盟モンスターが突然ブラックホールのようなものを作り出して何かが生まれようとする。現れるのは…。

「これで時間稼ぎだ！！現れる『ガチガチガンテツ』！！」

先輩が呼ぼうとするモンスターは壁としての役割が強い強力モンスター…。だったら…。

「じゃあ僕はそれにカウンターして『神の宣告』を使うよ」

ユウタ LP 4000 2000

これを封じてやった。私は悪あがきもさせない。

「そんな…。これではもう何もできないではないか！」

「残念でしたね～。先輩！手札がなくてこのターンがこれ以上進められないなら勝手に僕のターンに移動しますよ！」

「…。こんなはずでは…」

私はこのまま残ったモンスターでがら空きな堀内先輩のフィールドに一斉攻撃した。

手札も0で自分から肥やしてもいない墓地も信用ならない守りであつという間にライフは0になった。

堀内 LP 4000 0

「嘘だ…。嘘だ…。嘘だああああああ。私は全国大会4位の實力なんだぞ。こんな簡単に負けるなんて…」

「たまたま僕の手札がよかったからですよ。逆に僕が後攻だったらこのデュエルはどうなったかはわかりません」

堂々と落ち込んでいる先輩に決め台詞を言った。

確かに私の感想通りに確実にわからない試合になっていたはず。

先行無限ハンデスが成功しなかったら私は負けていたかもしれない。勝負は決着が付いたんだ。結果が全てだ。私は勝ったんだ！！

「約束通りにこれ以上僕に何もしないって約束してくれるかい？わかったならもう寝るよ」

「……。私と一緒に体をくつつけながら寝るのかい…。ハアハア」
「だから…。もうこんなことをしないって約束しただろ」

鼻息をしながら私に近づいてくる。かなりキモイ表情をしているから余計に腹が立つ。何回言っても堀内先輩はわかってくれないようだな。

「私はもうアソコの痛みは回復したのだよ。もう痛くないから触ってもいいよ。奈々川君！！」

「うわああああああああああああ」

先輩が変なものを近づけてきたから私はとっさの反射で無意識の内に再び急所を蹴って部屋から逃げ出した。

さっきより力をあげて蹴り上げたからさっきより痛そうだけど後ろを振り返らなかった。先輩が追っかけてくる気配もない。

男のものを見せてきたからトラウマになりそうだよ…。こんな気持ち悪い人と絶対に同じ部屋なんてもう無理だ…。ありえない。

これから一体どうすればいいんだろう…。私…。居場所がないよ…。
もぉやだよ……。

こんな辛い思いをしながらも私が男装している理由はちゃんとある。決して私は女が性的に好きな変態とか、男に近づくために化けているわけでもない。

今からかなり昔に私の父はあの伝説の社長の海馬瀬戸が主催したバトルシティに参加した。

父はかなり荒れてレアカードを強奪する集団の『グールズ』という組織に入り、いろいろと悪さをしていたらしい。

柄の悪い連中とともに裏でカードを弱い物から盗み、カードを複製したり裏ルートで売ったりするなどの行為をよくした。

そしてバトルシティに参加した父は、のちの初代デュエルキングになる武藤遊戯と戦った。

私の父は武藤遊戯を追い込むものに成功したものの最後の最後に逆転されてしまって負けてしまった。

このデュエルはグールズのボスが命令し自分の死を掛けて戦っていた為に、これで人生は終わると確信した。
しかし武藤遊戯は命乞いをした父を助けてくれた。助けて貰ったものの、父はそのまま精神的ショックを受けることになった。

優勝したのは決勝で戦ったグールズのボスに勝った武藤遊戯と世間に知らされていたらしいが、それでも父の精神は復活しない。
おまけにボスを失ったグールズも世の中に完全に消し去ってしまった。世間はこれが歴史とともに忘れ去られたしまったようだ。
何ヶ月か立つてまだ若かった父はまじめに工場関係の仕事で働きだしたもののカードに対する未練は諦め切れなかった。

若い時の黒歴史が心残りだったために、父はこのあとの人生は辛いままだったので死を望もうとしたんだけど、そこで私のお母さんになる人であったんだ。

その人はかなりの美人で積極的に辛い自分の為に嫌といわずに優しくしてくれた。そして一緒に暮らすことになったんだ。

母も同じく通っていた学生時代に、世界を救って伝説を残した遊城十代と一緒に学んでいたらしい。

父も母もお互いにカードを趣味にしていたために気があっていた。だからこのまま結婚して子供を生んだんだ。

そこで私が生まれた。

双子だった。私とそっくりに一緒に出てきたのは男の子。ユウタとナナとお母さんは付けてくれた。

私達が大きくなるにつれて時代は大きく代わりだしてやがて、D
ホイールと呼ばれた大きなバイクで行われるライディングデュエル
というものが流行りだした。

そして私とお兄ちゃんが5歳になってデュエル・オブ・フォーチ
ユンカップが開催されて家族4人で行くことになった。

最初は誰もが圧倒的な強さで見せ付けてくれた前回のキングのジ
ヤックアトラスが勝つと期待されていたが、不動遊星という人物が
優勝した。

この人はマーカー付きで最初は嫌われていたのに優勝したとたん
に熱い声援が送られた。

私とユウタも最初はジャックを応援していたのに前代未聞の優勝
者があまりにもすごくて、こっちに私達も感動して流されてしまっ
た。

「すげえー！ー。不動遊星って人、顔に変なマーク付いているの
に優勝しているよー」

「何度も何度も、お母さんは言ってるでしょ！人を馬鹿にするのは
やめなさい！ユウタ！ー」

「ちえー」

ユウタはお母さんに怒られて軽くゲンコツされた。今思うとこの
時が一番楽しかったんだな…。

この時のお兄ちゃんとは活発な男の子だったためによくお父さんと
お母さんに怒られていたのが印象だった。

「ナナ、これからデュエルキングのふどうゆうせいと握手してくる
っ」

興奮した幼かった私は興奮のあまりに勝手な行動を出て座っていた席から離れた。

「ずるいぞ！ナナ！！俺も不動遊星に握手してもらうんだよ！待てー」

「コラ！！ナナ！ユウタ！またお母さんを怒らせるとおやつを抜きにするわよ！！」

おやつを抜きにするとわれて足を止めた私とお兄ちゃん。

勝手に子供達だけで移動するからお母さんは怒っていたけれどもそれでもお父さんは違って優しく話しかけてくれた。

「ナナ、ユウタ。お母さんに怒られてもいいから行くんだ。お前達は夢があるんだからお父さんの昔のようになってはほしくない。子供の純粋な気持ちは大切だぞ」

「お父さんのほうが大好きー」

「早くしないと握手してもらえなくなるかもしれないぞ。ってそれより握手なんかしてくれるかわからないけど…」

私はそのままお父さんの大きな足に飛びついた。厳しかったお母さんと違って私達を大切に思ってくれる。

それにくらべてお母さんはデュエルアカデミアの教師をしていたために、とにかくうつさくて私は嫌いだった。

「やーい。俺はナナを置いて先に行ってくるぜ。じゃあなー」
「待つてよ…。お兄ちゃん！！ナナを置いていかないで…」

釣られた私もお兄ちゃんと一緒に席を飛び出した。だがすぐに私はお兄ちゃんを抜いた。

「くそ…っ」

後ろからお兄ちゃんの悔しがる声が聞こえたのはわかった。双子なのにこの時から私のほうが駆けっこは早かったから抜されることはなかった。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん。私と握手してよ!!」

いる場所は分らないのに、関係者以外立ち入り禁止って書かれた場所を無視して適当な場所を走っているところを私は見つけた。ちょうど廊下で1人で歩いているところを私は見つけたんだ。

この時は偶然偶々だったのですがいいと思わなかったのだけど、あとで私とお兄ちゃんの夢を大きく変えることとなる。

「ああ…。握手くらい構わない…」

「やったーーーー」

動揺することもなく私の勝手なことを聞いてくれて嬉しかった。大人の大きな手の中に小さかった私の手が結び合って握手をしたくれた。

この人の手の腕前が優勝したんだと思うとすごくワクワクした。この感じは今でも忘れてはいない。

「あ、ずるいぞ!!! ナナの奴!!! 俺より先に握手するなんて!!!」

「……!!!。そんなに君は焦ることないさ……」

いきなり後ろから現れたお兄ちゃんがちょっと私達が似すぎてビツクリしていたように遊星はリアクションしていたけれど、それでもチャンピオンらしく接した。

そしてお兄ちゃんにも私がしたと同じように握手した。そして調子に乗ったお兄ちゃんは遊星にこう言った。

「俺、絶対お前を絶対倒してデュエルキングになる……!!」

「……俺を倒すか」

「私よりデュエルが弱いお兄ちゃんが勝てるわけないじゃん!!」

「うるせえ……」。いつかナナも遊星も倒してデュエルキングになるんだよ……!!」

お兄ちゃんの適当な言いがかりに、キングは一瞬呆れた顔をして返事をすると思ったが、私が思ったことと反対のことを言った。

この冷静な性格がすごいかった。今でも私は遊星をとても尊敬する。この冷静な諦めない性格が大会優勝に繋がったのだと思う。

「その君の大きな夢はすごいと思うな。俺も君と同じように大きな夢があるからここに來れたんだ。ここまで來れたのは諦めなかったからだ。君も頑張ってデュエルを強くなるんだ。そうしたら相手をしてやる」

「え……。今、相手してくれるわけじゃないの？俺の最強超上級モンスターデッキでここで倒すはずだったのに……」

「お兄ちゃん、そのデッキ使って一度も私に勝手ないでしょ！だから遊星に勝つなんて無理無理……」

「だから、そのことをこいつの前で言うなよ……!!ナナの馬鹿……!!」

「君たちは兄弟そろって中がいいんだな。家族も兄弟もない俺に取ってはうらやましい…。君たちは絶対になれそうだ。その楽しそうな目が俺をそう思わせる」

「へへへ。俺は絶対にデュエルキングになるぜ!!」

「お兄ちゃんがなれるわけないでしょ!!」

お兄ちゃんは遊星に言われて調子に乗った発言に私は馬鹿にしたように言った。

それでも元々私より強気な性格だけで、実際は才能がないお兄ちゃんがデュエルキングになれるはずもないと思っていたんだけどあんなことになるなんて。

第6話 『レズ ハッピー』

そして次の朝、私は昨日の堀内先輩の恐怖から寮を飛び出したまま帰ってこなかった。

私は学校の近くの公園で野宿をした為にあれからずっとお風呂に入らなかったから体中がベトベトして変な感じがする。

本当は朝早くに男風呂に入って済まそうと思ったけど、いきなり急に誰かが入ってきてきそうで怖かったから止めた。変な人ばかりだから男の人は嫌いだ…。

体中の疲れが取れないまま学校の時間帯になってしまったので私はそのまま学校に行くことにしたわけだけど、

それでも学校では休める暇もなく何人ものの女子生徒にモテモテな私は、ちよつとだけしようとしていた昼寝もできずに休憩もできないよ。

「はつくしよん!!」

やっぱり昨日は外で寝たから風邪引いたのかな…。

放課後になつても寮に帰る勇気がなくじっと心配そうに空を見上げていたら、ピンク色のロングヘアの神崎さんが心配そうに僕のクラスにやってきた。

「どうしたの？マイスレイプ。具合悪そうだけど…」

私が今、信用できる人物は神崎さんしかいない気がする。それほどこの学校生活は希望がありそうにない…。

だから精神不安定な私は神崎さんに頼ることにしたら素直に聞き入ってくれた。

「昨日から僕はずっと寝ていないんだ……」

「は？ ユウタって昨日は寮だったんでしょ……」

「そうだけど……」

「不安があるなら私に言ってみなさいよ」

私のことも面白そうに優しく接してくれるこの人なら私の悩みごとと聞いてくれる感じがした。だから私は本当のことを話した。

「僕……。昨日、宮城が言っていた通りに堀内先輩に襲われたんだ……」

「えっ！！ 本当に襲われたの？」

「……」

「それじゃあ掘られたわけじゃないでしょうね……。あんたのものは私のものだって前に言っただしょ」

「僕はおもいつきり蹴って必死で逃げたさ……。だからもう寮にはいられないんだ……。だからもう私には住む場所はない……」

宮城に冗談で言われた通りに起こってしまったことが本当に起こるなんて怖かった。だから同じ異性の神崎さんと話すと安心する。本当は私は男の格好をしているから自分の弱い弱い心を晒せないのが辛いんだ……。今の自分に居場所はないから……。

「それは良かった。ちょうど欲しいと思っていたのよね」

神崎さんは急にニコニコしながら私に近づいてきてあることを言う。

「だったら私の家に来なさいよ！！」

「い、一緒につて……!？」

私はいきなりのことだつたんで言つてることが意味わかんなかった。女の子と一緒に暮らすつて…。

「だから、居場所がないなら私と一緒に暮らさないよ!! それに1人暮らしだといろいろと怖いのよ…」

顔を真っ赤に染めながら恥ずかしそうに私にもう1度言つた。やっぱり神崎さんは本気だよ…。

「で、でも…」

迷っている私…。一緒に暮らすという選択肢の以上、神崎さんと暮らすつてことは私が女の子だと隠しきれないものではない。

まして同棲して暮らすつてことはエッチなこともされる可能性もあるんだぞ……。こんな危険な状況を365日も隠し通せるのか…。

「いいからついてきなさいよ!」

「ちよっ…」

私に回答をする権利すら与えずに手を引っ張られて連れて行かれた。

「すごい！ 広いよー！ー！ー！」
「どうよ。プロリーグで活躍していろいろとお金はあるのよね。1人暮らしは始めたのはいいものの、私1人で住むなんて勿体ないでしょ」

私が連れて行かれた場所は巨大なシャンデリアに大きなリビングに壮大な数の部屋があるまるで金持ちの大豪邸だった。

部屋中にはプロリーグで大量の何度も優勝したトロフィーと限定カードがガラス張りに置かれていて芸術と思えるほどおしゃれ。

私と神崎さんの2人でも十分広すぎるくらいだった。昨日の寮とは比べにもならないくらい充実している。

「そして！ ここはあんたの部屋よー！」
「うお~~~~~」

大きな階段を上って案内されていくとここが私の部屋だと神崎さんに言われた。部屋をのぞいてみると衝撃すぎて驚いて声が出た。この部屋には男らしい汚い匂いも一切ないし、寮のときとは違って端っこに大きなベッドを置いていてもスペースがいっぱいある。大きな薄型の最新テレビに勉強しやすいそうな机、ベッドには私好みの『マシユマロン』のぬいぐるみが置いてあって普通の女の子のお部屋だ。

それにこの家には私達の学校がここからすぐ見えるほど近い。こんな環境に私を住ませてくれるなんて…。神崎さんは優しいな…。

「どう？ スレイプちゃんのアなたには勿体部屋でしょ」

「ホントにここに住ませてくれるのか！！」

「いいわよ！」

何度も確認するほど私は興奮していた。神崎さんとの部屋も別だしこれなら着替えも大丈夫そうだ。だけど、1つだけ問題がある。

「1人でお風呂に入ってもいいのか？」

「はあ…？ あなた誰と入るつもりなのよ…」

ちよつと変な質問したけどこれで大丈夫そうだな…。これなら変態なことをされずにすみそうだよ。

「さてと…。あなたは私の奴隷なんだからね！ この家に住みたければ私の命令に逆らえないのよ」

「え…？」

安心したと思ったその時、急にベッドに押し倒して神崎さんは私の顔に近づけた。

甘い果実の香水のいいにおいと共に女の子独特のやわらかさが体に直接当たってドキドキする。私と同じ異性なのに何なんだこの感じ…。

って…。駄目っ！私はまだ女の子なのよ！！

「まずは私にご奉仕して貰いましょうか。まずは服脱ぎなさいよ」

「ちよ、ちよつと待ってくれ！」

このまま変なエッチな展開になると思った私は神崎さんを押し戻した。これ以上何かされると私の威勢が崩れそうになる。

「僕達は友達同士だろ。びっくりしたじゃないか！ 変なことをやるために僕をここに連れてきたのか！」

これ以上されると昨日襲われた先輩とやってることと変わらない気がすると思った私は本当のことを言った。神崎さんは、

「勘違いしないでよね！！ 一緒に住むってことはエッチなことはお断りよ！」

と顔を赤く染めてすぐに止めてくれたので悪気はなさそうだ。これなら夜中に襲われるってことはないから安心できそう。

「エッチなイベントはあんたが私のことを好きっていうまでおあずけなんだから！！ まだ私のことを好きって言っていないでしょ」

「別に… そんな気には…」

「何よー！！」

「それと出来ればそのエッチなイベントも遠慮してもらいたい…」

「あー……。もう！ 女の子と一緒に住むのに異性としてみてないなんて」

「僕は君をそんな変態な目では見てないよ……。友達として見ているだけで…」

「ムカーッ」

良かった……。信頼できる神崎さんと一緒に暮らせることができる。私は今、最高に幸せだ。これなら安心して学校生活を続けられることができる。

「あ、そういえばあんたの為にメイド服買ってきて来たのよねー」。

「ここに来た以上私の命令は絶対よ」

漫画とかでよく見かける黒のワンピースに白のエプロンの組み合わせに、白のフリルの付いたカチューシャの組み合わせのもの。

こんなのをにやけながら持つてくるなんてどんな趣味をしているんだ神崎さんは…。

「め、メイド服って僕のことを馬鹿にしてないか!」

「いいから着替えなさいよ!」

ここに来た以上はしょうがないか…。

でも、私一度こういうものを着てみたかったのよね。私は男の子の格好なんだからもう、こんな可愛いお洋服を着れないと思っただし。

「わかったからここを出てくれないか。着替えをするから」

「お! 着替える気満々じゃないのよ。変態!」

「だから、僕は変態じゃない!!!!!!」

神崎さんを追い払って私はメイド服に着替えた。

ちよっと小さいサイズだから私の胸が余計にちよっとだけ苦しかったけど…。

「どう…かな?」

「いやーん。ホントに女の子みたいに可愛い!」

何だかんだ言っただけで着ちゃったな…。自分でも言うのはあれだけど

すごく似合っている気がする。

「絶対に似合うと思ったのよねー。さすが、だてに女装の癖があると思っ たわ」

クスクス笑っている神崎さん…。やっぱり私のことを馬鹿にしている気がする…。

「じゃあ、この晴れ姿をフィルムに抑えとくわね」
「やめろー!」

カメラを構えて私の恥ずかしい格好をお構いなしに写真を撮った。最初は持っていなかったのに私が着替えている間に持ってきたんだな…。

「これであんたは改めて私の奴隷ってことを確信させたのよ。この写真をばら撒かれなくなったら大人しく言うことを聞くのね!」

「脅しのつもりか!」

「って冗談よ…。あんたって本当にからかいがあるわね」

「むう〜」

「冗談でも私には怖いよ…。でも、私のことをよく知っている神崎さんなら変なことをしないはずだと思っている。だからこうやってからかっているんだな。」

「そろそろお風呂できそうだからしたくしなさい!」

そういえば、さっきお風呂の準備をしてくれたんだっけ…。もうできたのか…?

「僕のことを絶対に覗くんじゃないよ！
いいか！絶対に……！！」

エロイベントは起きないと神埼さんは言っていたけれども念には念を一応忠告しておく。

「私を何だと思っているのよ！！ あんたみたいな変態じゃないわよ！！」

「いくぜ クリアマインド アクセルシンクロオオオオオオ
オオオオオオ 招来せよ！」 シューティング・スター・ドラゴ
ン！！」

1日ぶりのお風呂に興奮していた私は疲れた昨日の汗を取るよう
に大好きな遊星のマネをしながらシャワーを流した。

だってテンションかなり上がるのよ！ 神崎さんの家のお風呂はまるで露天風呂かとい瞬思うほど広かったし、何よりも外からの綺麗な景色が見える。

この地域全体を私のものにしたと感ずるほど征服した感じ。こんな絶景で癒しの時間を取れるなんてまるで天国みたい。

「ふう」

湯船にゆっくり浸かりながら今まで苦労した日常を忘れるくらいに気持ちいい。

湯に浮かんでいる自分の大きな胸が、ここなら男を隠していると

いうことを忘れて唯一女性の時間を味わえることになりそうだな。
私の戸籍的には男だ。素敵…。私の目標はデュエルキングになる
こと…。私…。超カッコいい！！

不動遊星に会ってから私とお兄ちゃんは人生が変わった。

それにお父さんもお兄ちゃんが「俺はデュエルキングになる！！」
と言った途端にやる気が出てきて、再びデュエルがしたいといって
プロデュエリストの道を進んだ。

私もお兄ちゃんに負けずとデュエルのことを勉強した。そのおかげで…。

「第124回。小学生大会の優勝は奈々川ナナちゃんです！！」

「お父さん！！ お父さん！！ ナナすごいでしょ！ また優勝したよー！！」

幼稚園のころと会わせてこれで10回目だった。私ははしゃいで
お父さんのほうに駆け寄ったんだけど、お父さんは全然嬉しそうな
顔をしていない。

「何で、ユウター！！ お前のほうは3位にもなっていないで4位なんだよ！！ 妹のほうが強いのは恥だぞ！！」

私ではなくお兄ちゃんのほうに向かっていつて怖い歪んだ表情をしてお兄ちゃんを叱った。

お兄ちゃんだって4位という普通の人よりいい成績のはずなのにどうして怒るんだろう……。

「あなた……。ユウタだって頑張ったの……。怒ることないじゃない。あなただってプロリーグでよく失敗するじゃない」
「うるさい……」

仲良かったはずのお母さんなのにお父さんは気が狂ったように怒鳴った。

怒った表情だったから昔の優しくったお父さんの面影すら一切ない。あんなにも励まして優しくしてくれてたのにどうして……？

その理由はお父さんはプロリーグに入って世間に注目され始めたからだった。

注目されたのはよかったものの、一部の人からは反対の声が上がっていた。

マスコミは過去にお父さんはグールズという悪い組織で働いて悪気を働いていたことを新聞などでうわさを流されてしまったからだ。それにそのことを思い出したお父さんと同世代の人が思い出して私達の家に「死ね」や「クズ」などの落書きをされた。

脅迫状の手紙や毎日鳴り止まない電話が私達家族に大きな傷跡を残したんだ。夜中に暴走族が玄関を蹴っていくことがあった。

父がグールズに入っていたというそのことで私とお兄ちゃんは「父は盗み」と言われ学校でいじめを受けた。

そしてお父さんはたった1年でデュエルが出来なくなってプロリーグの道から降りた。

私達は追われることになり、ネオドミノシティではなく遠くの町へ引っ越したんだけど、私とお兄ちゃん是不動遊星に言われたことを忘れてはいない。

絶対にデュエルキングになるということを胸に頑張っている。辛いことがあったけどお父さんとお母さんがいたからへっちゃらだった。

でも…。一番悲しかったことはお父さんがもう、昔のお父さんではなくなってしまったことだった。

「ユウタ！ そんなクズカードを入れているんじゃないよ！ もっといいカードがあるだろ！」

「で、でもこのカードは初めてお母さんから貰ったものなのに……」
「それにだ。そのプレイングはなんだよ！！ 勝つ気ないだろ！！」

今までデュエルが好きだったお父さん。生活の全てだったデュエルを失ってしまったあとは……。

自分の子供がデュエルキングの道へ進んで活躍すること……。ただそれが世間へ見返す手段として考えることとなっていた。

「あなた……。ちょっとユウタに厳しくないか……。ナナが特別にデュエルが強いだけで、ユウタもよくやってるほうよ」

「お前は黙れよ！！」

家庭の環境が変わったせいで今までの仲良し家族だったという関係が崩れていった。お母さんもお父さんのことで呆れていた。

「ねえ！！ ナナは！！ ナナは何が悪いの！ どうすればもっと強くなれるの！！」

マイペースだった私はいつも通りのテンションで接したけれども

…。

「別にお前は好きなようにデュエルをすればいい」

「え？…」

お父さんは冷い返事をするだけ。私は悲しかった…。

お兄ちゃんにはいつぱいアドバイスはもらえるのに私だけは適当に済ませるだけで、愛情を貰えない。

それでも私は諦めずに何かを教えてもらおうと調子に乗ると…。

「今度のデュエル大会も絶対に優勝するから！！」

「…。そうか…」

私には全然期待されずにお兄ちゃんばかり期待しているお父さん…。私のことは嫌いなんだと思いながらも必死で本を見たりして影で努力したんだ。

そして次のデュエル大会でも優勝した…。それなのに……。

「お父さん！ 見てみて！ 約束通り優勝したよ！ 褒めて褒めて

――！！」

「よかったな…」

周りの2位だった人や3位だった人は家族で喜んでいたのに、私達親子だけは全然喜んでくれなかった。

やっぱりこんなにも落ち込んでいる原因はお兄ちゃんが準々決勝で敗退したから機嫌を悪くしていたからだった。

「どうしてお前は妹のように勝てないんだ！！」

ついに怒りを爆発させたお父さんはいつぱいにビンタしてお兄ち

やんを吹き飛ばした。

「妹に負けて悔しくないのかよ！ お前は俺の子じゃない！」

「……ガハッ」

デュエルディスクをムチのようにしてお兄ちゃんを叩いた。

お兄ちゃんは声を出さずにひたすら泣きながら黙って悔しそうな目でお父さんの虐待にひたすら耐える。

「お父さん…。やめてよ！ どうしてお兄ちゃんを叩くの！？ お兄ちゃんは悪くないよ！ ナナのせいなの？」

私のせいでお兄ちゃんが痛い目にあっていると思った私。止めてもらうために必死でお兄ちゃんを助けようとしたんだけど…。

「私がお兄ちゃんの分まで頑張るから…。だからもうお兄ちゃんを怒らないで…」

「ふざけんな！！」

「ホラ！ 予行練習しようよ！ ナナはデュエルキングになったの！！ だから優勝商品の伝説のカードをお父さんにあげます！」

紙で神のカードと書いたカードをお父さんに渡した。けれどもお父さんは表情を変えずに…。

渡したカードをビリビリに破いてこう言った。

「お前には絶対にデュエルキングになれないんだよ！！」

「…。どうして…。不動遊星…は私になれるって言ってくれたのに…」

「お前がただでデュエルが強くても全て無駄なんだよ…」

「そんなことないよ…。ナナは頑張るから…」

「うるさい…！ 女は…」

私がデュエルキングになれば再びお父さんはまたあの時の笑顔を
取り戻してくれると思った。

けれども私は女の致命的な弱点を知ることになる…。

「女はデュエルキングになれないんだ…！」

「お前がいくらデュエルが強くても、どれだけデュエルが強くても
デュエルキングになれない…。女がデュエルキングになれるわけな
いんだよ…！」

女だからってデュエルキングになれないことを知った私は、いく
ら何を言われようと今まで強気だったのに精神に止めを刺された。
どんなに私が頑張ってもお父さんを助けることができない…。

「神様…！ どうしてだよ…！ どうしてデュエルの才能を兄のユ
ウタじゃなくて妹のナナのほうに与えてしまったんだよ…！」

「ナナは生まれて来なければよかったんだ…。うわあああああ
あああああああん」

「どうして…。妹の方に……！！」

私は大泣きした。涙が堪えるまで泣いた。私のせいでお父さんも
お兄ちゃんも苦しむことになるかと心に刺さっているから、余計に胸
が苦しかった。

「うわあああああああああ」

私は思い出したくもない悪夢を見て大きなベッドに敷いてある布団から飛び出して目を覚ました。

「どうしたの？ 私のスレイプ。すごいなされていたけど、何か酷い夢を見てたの？」

そういえば美人の神崎さんと同居していたんだっただな…。これからずっーとここで暮らすことになるんだっけか。

「ああ…。大丈夫だ…。問題ないよ」

心配そうにしていたので安心させるための台詞を吐いた。

「何か心配ごととか悩みごとがあるなら言いなさいよ！ 私達ももう、一緒なんだから隠しごとはなしだからね！」

「ありがとう…。本当に嬉しいよ…」

あまりの嬉しさにちょうど神崎さんが私のベッドの上で座っていたのでそのまま倒して抱きついた。

何故か抱きつくって行為が昔から私は安心するのよね。

「ユウタ……」

…体と体がくっついて直接体温を感じる。

やっぱり女の子同士の母性本能から安心できる…。私、このままそっちの方向に言ってもいいかもしれない…。

「こらーっ！っ！！ 約束もう忘れてるよね！」

「あっ…」

女の子らしく好き勝手に抱きつくと思われちゃうか…。私は今、男の子の格好をしているからね。

「ユウタ！ あんたの為に朝ごはん作って上げたんだからね！ 本当は奴隷だから犬と同じ餌にするはずだったのに」

「そう言うけどミカは素直なんだな…。そういうのをツンデレって言っただよ」

「もーっ…！」

「よく見ると君はちょっと可愛いな」

「か、可愛いって…。そんなことよりミスレイプ。早く顔を洗って着替えを澄まさない！ せつかく作ったご飯が冷めちゃうわよ」

神崎さんに言われて着ていた灰色のスウェットを脱いで学校の制服に着替えた。

私、奈々川ナナは、お兄ちゃんの名前を取って奈々川ユウタとしてここにいます。

これならデュエルキングになるという道のが開けるから……。辛いことがあっても諦めなければ絶対に夢が叶うって不動遊星が言ってた…。

だからお兄ちゃんとお父さんの為に私は諦めるわけにはいかない

んだ！！

第7話 『デュエル部に入るよ!』

あれから私が入学して約1週間が経過した。

男装して始めは不安が多かったけれどもみんな優しく面白
人達ばかりなので仲良くなれそうだ。

それに私のことを必要以上に追いかけてくる女子達も神崎ミカと
付き合っていることを知られた途端に少なくなったとを感じる。

少しずつ減ってきたので嬉しいような…。悲しいような…。それ
でもまだ一部の人には私のマニアのファンが残っているらしい…。

これからの学校生活の目標はデュエルキングを目指すという夢だ

!

どんな困難が私に降りかかってくるのかわからないけど、ドンっ
と掛かってきなさい!

チャイムの音色が学校に響きあたり長ったらしくて退屈だった学
校の授業も終わりを迎えて騒がしい放課後の時間に変わる。

授業中寝てた人も急に起きてテンションが上がるほどの時間帯
はみんなが活発になる。

こんな平凡な時間帯でも神崎さんの家に帰らずに、私と私の友達
の宮城は机に座りながらある会話をしていた。

「奈々川…。お前、部活入らないのか?」

「うーん…」

私は机に肘を立てながら窓に映っている野球部の走りこみの練習
を見ながら軽く返事を返す。

確かに部活に入らないとこの高校生活はかなり損することになる
だろう。

早く入らないといけないんだけど、私は何の部活に入るのか悩んでいるのだ。

1年生は早めに部活に入らないと先輩とのかかわりが不利なことになるから急がないと…。

そもそも私が男装していたせいで生活が安定してなかったおかげで遅れたわけなんだけどね。

周りの半分以上の学生の部活はもう決まっっていて活動をはじめているだろう。わかってはいるんだけどなかなか決まらないや…。

「そろそろ部活に入らないとやばいぜ。運動部とかは大事な大会の準備の練習に取り掛かっているみたいだし…」

「みんな、はやいんだなあ…」

大会といえば私の記憶で去年の女子バスの練習も大会で活躍するために忙しかった記憶が印象残っている。

それでも中学校の頃の大切な思い出だったんだけどなあ…。部活は学校生活の大事な思い出を作るから探さないと…。

「そういえば奈々川は厨房のころはバスケをやってたみたいだけど入らないのか？ 授業中でも点数取りまくりだったじゃん」

「僕はもういいよ…。高校では運動部に入りたい気分ではない」

「じゃあ文化系に入るのか？ お前女っぽいから料理とか音楽とか好きに見えるけど？」

「僕は料理も音楽も音痴だから向いてないよ…」

中学同様にバスケ部に入ってもいいけど、私が男装しているにあたって運動部に入ることはかなり面倒だ。

別に私が部活で点数をいっぱい取れる選手として大活躍しても別に性別がバレるってことはないけれど。着替えがかなり面倒そうだし、おそらくけど着替えは男子と一緒にすることになるはずだからこ

うやって何度も隠し通せるわけではない。

あと、宮城に勧められた料理部。言いにくい話で女として恥ずかしいことなんだけど私、料理できないのよね…。

「そういえば宮城は部活決まったのか？」

私に対してえらそうにいろいろと勧めてくる宮城。けれども自分のことはいいのかと宮城に聞いて見る。

宮城も授業で結構うまい姿を見せているのでスポーツ部に入っそう。男の人が好きなサッカーとか！

「決まってるわけじゃないじゃん！」

キリっとした鋭い口調で宮城は言った。

「なんだよ…」

「やっぱさ……。ほら……。帰宅部安定じゃん」

「はあ……。帰宅部って何もやらないでこのまま放課後帰っちゃう部活だろ……。帰宅部が一番つまらないよ」

期待して損した…。宮城はもっと面白そうな部活に入るかと信じていたのになあ…。

私は帰宅部には入らないよ。まず、部活を入らない選択肢がないから。

「お前さ、かなり悩んでいるらしいけどどうかしたのか？」

「だって…」

机でペンをモジモジと触りながら不安な表情を表して私は本当は入りたい部活があることを宮城に伝える。

「だって、なんでこの学校にはデュエル部がないんだよ!!」

「そんなことで悩んでいたのかよ…。期待して損したわー」

「別にそんなことじゃないだろ！　僕は今までずっと悩んでいたんだよ！」

私がずっと懸命に悩みを話したのに宮城は人事だと思って投げやりの返事で返す。

どうでもいいと思っっているようだけど私は、焦っているほどこの部活に入りたくて本気だっていうのに!!　　もぉ!!

「だったら他の部活に入ればいいのに……」

「代わりなんてないんだよ！　僕は今までずっとデュエル部に入ろうとしていたんだぞ！　この学校はデュエルが強い特進高校だって聞いたからここに来たのに…」

なかなか見つからずに懸命にこの部活を探しているけれども、本当に私は入りたい部活があるんだ。

そのデュエル部は部活動のパンフレットに載っていない。デュエルキングになる以上は私はこの部活に入って大暴れしたいのに…。そのことでさっきからずっと私の思考が停止していたんだぞ。代わりの部活なんてあるわけないだろ。

「ないわけないだろ！奈々川。よく確認しろよ！そのパンフレットには載ってないだけで、活動はしているぞ」

「どういうことだよ……！ だったら何でパンフレットに載っていないんだよ！」

この学校のデュエル偏差値は他の比べて極端に高いから、私はこの学校に来たのに何でパンフレットの紹介のページに載っていないのに疑問に思う。

「奈々川……。デュエル部に入るつもりなのか？ ある生徒が言っていたがそのデュエル部っていうのは入らないほうがいい」

「どうしてだよ……！ 僕はこの学校でデュエルキングになるためにデュエルを鍛えたいんだ！ それのに……」

「はあ……。お前、この学校の事実も知らないで入学したのかよ……この部活かなり荒れているって話を聞いたぜ」

「荒れてる？……」

「お前も知ってるだろ！ うちの学校のデュエル部は全国大会のチーム戦で2位の成績だったって」

「じゃあなんで……」

大きな大会で何度も優勝していて目立っているから私は憧れてこの部活に入ろうと決めたのに……。宮城が言うには本当の黒い話があるらしい。

話の内容をずっと聞いていると、この話は宮城の友達との間で知ったことらしいんだ。堀内のガチホモ話やらで変なことばかり詳しくすぎるだろよ……。宮城……。

「今の2年生がめっちゃくちゃ荒れているんだ。部活どころじゃなくて無法地帯になってるって話だぞ！」

「だったら僕がその部活を改善させるまでだよ！ 元々はデュエル

「強いんだからきつと話をすればわかってくれるはずさ」

「無茶だよ…。俺らがわざわざ地獄に入れていうのか？ 死にいくもんだぜ！」

「宮城？ ビビッているのかい？ 僕達は男なんだから！ 行くぞ！」

「おい！ だから俺は部活には入らないって言ってるだろ！ 入りたいんだつたら１人で言つて来いよ」

私は宮城の危ないと話していた警告を無視してまでもこの部活に入る情熱は強い。

２年生が荒れているとは言ったもののデュエルが好きな人たちは悪い人はいないから私は疑いない。

何しろデュエル部はデュエルが好きな人たちが集まっているっていう条件なんだからこの答えは間違いないはず。

部活には全く興味を持たない宮城だから私は誘ってあげてもいい。反応は返ってこないけど無理やり入れてやる！

「いいから帰宅部なんていうつまらない考えは止めたほうがいいぞ！」

「ひ、人の勝手だろ！ 俺はじつくりと勉強したいんだよ！」

そうやって私から逃げようとして今、考えたようなことを言うけど部活に入りたくないっていう目をしているから、私は、

「いいから一緒に行くよ！！ 部活を覗くだけでもいいだろ！」

「部活には入りたくないんだよ！」

私は嫌がる宮城を強制のような形で連れて行き、危険とうわさされるデュエル部っていうのを覗いて見ることにした。

たかが部活だっていうのに何でそんなに宮城は、人生が終わった

ような顔をしているんだろう？　ちょっと大げさじゃないのか？

部室だっていうのに長い階段を何回も上って行ってようやく4階の場所に、デュエル部と書かれたその部室を発見した。

なぜかすごい不気味な感じがする…。このデュエル部だけは他の部室とは別に遠くの場所にあるのが嫌な感じがするけど…。

「奈々川…。やっぱり帰ろうよ…。」

その部室の扉を私は開けようとすると急に誰かが私の肩は叩かれて、そこには弱音を吐いている宮城の姿が。

宮城は大げさに、生まれたての小鹿のように足をガタガタに震えていて私に怖いということを訴えている。

「せっかくここまで来たんだよ！　さあ開けるよ」

「やめろ…。やめてくれ！」

私に扉を開けさせまいと宮城は腕を押さえようとしているけど、私はすばやく回避してドアノブの取っ手に手を掛けた。

「さあ…。これから宮城も部活に入るんだよ！　いくよ！！」

ゆっくりとドアノブを回してその扉の向こうで始まるうとしている私の部活動に期待しながら扉を開く。

宮城が怯えているけどそんなもん男の子になった私には怖いものはないんだよ！

「やあ…！　奈々川君久しぶりじゃないか！！　ハアハア…」

「うわあああああああああああああ」

私は扉を開けた途端に鳥肌と恐怖を一気に感じた。

扉を開くと大柄でなぜか上半身裸で胸毛ボウボウの格好が目立つ、寮で私のお尻を襲おうとした堀内先輩の姿がそこにはあった。

部室には下半身が裸でうつ伏せになって死体のように倒れている男がいた。まるで死体のように動かないでお尻のところに白い液体のようなものが掛かっている。

変な匂いがする…。

「ハアハア…。今まで愛しい君が戻らないからずっと私は我慢していたんだよ…。ハアハア…」

堀内先輩を体中を震わせて飼い主を見るような犬のような表情で私を見ている。あの寮で起きたトラウマが思い出しそうだ…。

「だから言っただろ…。奈々川…。デュエル部には入らないほうがいいって」

「そんなの聞いてないよ！！」

「堀内先輩に掘られちゃうんだよ！！ だからこのデュエル部は嫌だっただんだ！」

どうやら宮城が恐怖に感じている理由がわかった。

デュエル部に入ろうとする男子生徒はみんな堀内先輩の餌食になってしまうから誰も入らないみたいなんだ。

このデュエル部には何人か先輩がいるようで、マナーとして1年

生は先輩に怒られないように早めに来ないといけない。

けれども早く着すぎてしまうといつも1人だけ早くいる堀内先輩がいるために男子生徒はお尻を狙って襲われてしまう。

それで新しく入ってきたそこで倒れている生徒はお尻を掘られた跡つてことなのか…。こんな風に私はなりたくない…。

私と宮城だけでは柔道も強い堀内先輩に勝てるわけもないじゃないか…！

「止めてくれ…！」

「うわあああああああ。来るな…！来るな…！」

大声で叫びながら私と宮城は追ってくる堀内先輩から逃げようとする。

部室の中でテーブルの上にあるデュエルの雑誌などが足に掛かってしまつて崩しながらも懸命に逃げる。

それでも大きな体の堀内先輩は遅かったので私は女子バスケット部で生かした瞬発力で素早く回避する。

それなのに…。

「何で僕ばつか狙うんだよ…！」

「知らねえよ！お前が女つばいからじゃないのか？」

私を過去に襲った堀内先輩は私をずっと追いかけている。寮で襲つた時のように死に掛けたくないから私は命掛けで逃げるのに、宮城の方は諦めてもらつたみたいで、来ないと安心したかのよう

に足を止めて私の方をずっと宮城は見ている。

「ああ、…。なんて君は愛くるしいんだ…。君の泣け叫ぶ声が聞きたいよ…。ハアハア…」

キモイ……。キモイよ……。

捕まったら終わりだ。今度こそ私が女だつていうことがばれてしまふ……。今度は宮城もいるから確実に不味いよ……。それなのに……。

「つーかまえたー！。ハアハア……」
「いやー……」

壁際に追い込まれた私は腕の自由を空中で奪って逃げられないようにされた私……。

これから私はあの人のように掘られてしまふ……。そう思うと私はもう駄目だ……。

「先輩は僕に一度デュエルで負けましたよね……。もう襲わないって約束したじゃないですか……」

「はあはあ……。それは私が油断して股間をおもいつきり叩かれたからじゃないか……。はあはあ……。あの時は気持ちよかったなあ……。君も今から同じことをしてあげよう」

寮では私が不意をついて勝利したからであつて今は、堀内先輩は絶好調だから力で勝てるはずもない……。

宮城は呆然とした表情で、下半身を狙おうとして私のズボンのベルトを脱がそうとしている姿を見ている……。

あの時は女物のパンツを見られてもばれなかったが今度は宮城もいるんだ……。私は男物を履いてないから宮城にばれる……。

「ぐわあ……」

「なあ……。堀内……。またお前は男を襲おうとしているのかよ」

「こ、これは違うんです……」

私のズボンのベルトをはずして手を掛けたとき、急に誰かが堀内先輩の頭を蹴ると苦しみ出して倒れた。

後ろには宮城でもない。助けてくれたのは今時流行らない古いリゼント風の髪型の不良のような乱れた制服を着ている男性。

どうやら別の先輩が部室に帰ってきたようだ。

「まったくよお。お前がいるから部活に女の子が入って来ないんだよ
……」

「グハッ」

倒れている堀内先輩を追い討ちを掛けるように何度も何度もリゼントの男は顔面を殴る。

「俺様がリア充になってハーレムになるっていうのにお前がキモイから女の子が入って来ないじゃねえかよ！」

「ごめんなさい……。ごめんなさい……」

「入ってきた女の子全員孕ますっていう夢を叶える夢が、お前のせいで叶わなくなったじゃねえか！ どうしてくれるんだ！！ 死ね

「!!」

女の子、女の子と言いながらリーゼントの男は堀内先輩をさらに殴り、鼻から血が出ようと止めることはない。

普通に女の子が引く台詞なんだけど…。今のは男になると決めた私でも気持ち悪いと思った。

「数少ないデュエル部の部員に手を出すのはいただけない…。柔道が強いつてだけで」

「私は柔道は全国で7位なんだぞ…。それなのに私をよくも…」

堀内先輩は柔道部で活躍していたと私に言っていたのに、不良の男が押している。

あの堀内先輩の体系が役に立たないほどあの先輩は喧嘩が強いなんて…。でも、ちょっとリアルファイト強くないか…？

「お前、舐めてんだろ！ カードと柔道どっちが強いんだよ？」

「は？」

「だから！ カードと柔道はどっちが強いかって聞いてんだよ！」

「柔道に…決まってるでしょうが…」

「やっぱりてめえ！ この部活舐めてんだろ!!」

「痛っ!! 痛っ!!」

「ホラ！ やっぱカードの方がつええじゃねえかよ…」

質問に答えた堀内先輩に怒りを感じたリーゼントは近くに落ちて

いたカードを堀内先輩の目玉にめがけて投げた。

目に入った堀内先輩は目を押さえながら苦しみもがいている。助けてもらったのはいいものの堀内先輩以上にこの人怖い気がするよ…。

それでも堀内先輩にやりすぎな気がする。さらにリーゼントはポコポコに何度も蹴って飽きるまで続けた。

「あー！。面白かった…。さてと…。害虫を駆除してやったぜ」
「大丈夫ですか！ 先輩！！」

私のことを襲ったとはいえ、あまりにもポコポコにされていたので可哀想だと思った私は堀内先輩のほうに近づいたのだが、堀内先輩は意識はなかった。

ぴくりとも動かないってことは気絶しているの？ これをじっと見ていた宮城は表情が固まって言葉もでない。

「お前らが新入部員なのか…？」

「酷いじゃないですか！ そこまでする必要はないじゃないですか！」

「その女っばいお前がターゲットなんだろう。この俺様が助けてあげたんだから感謝しろよな」

「確かに助けてもらったことは嬉しいですけど…」

批判した台詞を言ってしまったけれども確かに助けてくれたことは嬉しい…。

これで私が女だったということがばれずに済んだんだ。これに懲りて堀内先輩がもう襲わなくなればいいんだけど。

ここで堀内先輩がいなくなったことで一旦間をようやく取ること

ができたので自己紹介が始まった。

「俺様の名は中里カイだ。よろしくな。俺のことはカイザーって呼べよ」

「か、カイザーって…」

中里と名乗った先輩が言ったカイザーってかつて遊城十代と同じデュエルアカデミアにいた丸藤亮と同じあだ名じゃないか…。

こんなヤクザのような性格でだらしないチャラ男みたいな先輩の呼び名がカイザーっておかしくないか。私は絶対に似合わないと思う…。

「（奈々川…。絶対に本名で呼ぶなよ…。あの先輩は今ので危険な人物ってことわかっただろ）」

「（で、でもカイザーって…。ぷっ）」

思わず噴出しそうになってしまいそうになってしまう私。でも絶対に本人の前では笑ってはいけないな。

でも、カイザーって呼ばないと本当に堀内先輩のようにサンドバツグにされそうだから気をつけないと…。

「その女みたいな奴！ エロ本買って来いよ」

「え、エロ本！？」

何かを考えているときに急に『エロ本』という単語を聞かれる私。思春期の男の人が女の子のあんなことやそんなことされるのを妄想するために見るイヤラシイ本を何で私が買わないといけないんだよ…。

「近くにコンビニあるだろ！ いいから買って来いよ！ それを今

日、おかずにするから」

「何でエロ本なんて買わないといけないんですか！」

「だから、後輩なんだから先輩の命令は絶対なんだよ！ いいから買って来い！！ つまらない内容だとぶっ殺すぞ！」

女の私がそういう本に詳しくないから男の宮城に頼めばいいのになぜか私に買って貰おうとする先輩。

でも、買わないと堀内先輩のようになりそうだからと宮城にコソと言われたので私は部屋を出た。

ついでに一緒に宮城もここから逃げるようにここから出た。

学校から歩いて5分の所の近くのコンビニに私と宮城は向かった。コンビニの雑誌コーナーの前でカイザーが好きそうなジャンルのエロ本をデュエル部の噂話やカイザーの詳しい話を宮城としながら探した。

まだ18歳にもなっていない15歳の私と宮城がエロ本を手にして読むことはいけなはずだけど、命令だから仕方がない。

「本当は元々部活に入る気がなかったのになんでこんなことに巻き込まれなきゃいけないんだよ…。おかしいだろ」

「悪いな…。でも僕と一緒にこの部活に入るよ」

「はあ…。帰宅部でいいと思っていたのに…。まあ、お前と一緒に大丈夫なのかな…？」

「でも、悪い人じゃなさそうじゃない？ あの中里先輩は」

「馬鹿！ カイザーって言えって言われてたの忘れてるだろ」

「あ、そうだった…」

「お前、うつかりだから本当に気をつけろよ！ マジで殺されてもしらないぜ」

「あの人ってデュエル部の部長さんなの？」

「違うよ。あんな暴れん坊が部長なわけないだろうよ」

カイザーは本当は悪そうな人に見えないんだけどなあ…。私達を助けてくれたんだから優しそうな人っぽいし…。

でも、これから私達はカイザーの新的恐怖を思い知ることになるとは知らなかった…。

私はどれがいいかエロ本の中身を開いて内容を確認しながらカイザーのことを知ってそうだったので宮城に一応いろいろと聞いて見る。

聞いて見たところ、中里先輩はカイザーと自ら名乗るから、あの容姿とは想像つかないほどデュエルの腕はプロ顔負けのレベルらしい。

それなのに気も悪いほど女の子に直接「受精してくれ」「やらせてくれ」とか言うから女子には嫌われ、デュエル部には女の子が入らなくなっただけで。

この問題のせいで堀内先輩とカイザーのせいで男も女も新入生の生徒が部活に入らなるほど、恐怖の部活と言われるように有名になったからパンフレットに載らなくなった。

でも、デュエルの腕はここの部活のエースらしいけど、凶暴な性格だから部長にはなれずに別の人になったからこのことをかなり気

にしているらしい。

だから去年の全国大会には出れなかった。他の学校の生徒を暴力で喧嘩の問題を起こした為に学校を退学の危機になりそうになったもののギリギリのところで停学で済んだ。

カイザーの代わりに出た堀内先輩が高校全国デュエル大会4位ってことは…。それを倒した私はカイザーより強いってことよね…。

この部活も本当は大したことじゃないんじゃないかと少しだけだけど思ってしまった私…。でも、運が良かったただだから浮かれちゃ駄目！

「奈々川…。何でレズものばっか見ているんだよ！ やっぱ変態だなー」

「ち、違うー！」

神埼さんの影響で百合に目覚めつつある私は意識してないのに自然に見ていた。

それよりこんなところでゆっくりエッチな本を見ている場合じゃないな。こんなところを誰かに見られたら勘違いされちゃう。

「宮城だつてずっとその本ばっか見てるじゃないか！ そっちも変態だろ！」

変態。変態と言ってきたから私も変態と言って宮城に返す。

そういうことを言った宮城こそ変な物を見ていると思った私は、宮城がさっきからずっと見ている雑誌を奪ってどんなものを見ているか確認した。

奪った雑誌を確認したのだがイヤライシーンが全くない…。ペー
ジをいくらかめくってもそのシーンが一切ない。この雑誌はもしか
して…。

「変態なお前と違って、俺はデュエルの雑誌を見てただけだよ」

「僕のことを裏切ったな！」

「別に裏切ってないだろ。元々はお前がエロ本を買ってきてと言わ
れただけで俺は別に用はないんだよ」

「くそっ！」

「それに俺はこの雑誌に、今回は限定カードが付くみたいだから5
冊くらい買う予定だからお金はない。お前は約束通りエロ本を買い
な！」

宮城はカードが付くからといって同じ雑誌を何冊も買ってコンビ
ニを出て行った。ずるすぎるだろと意識していても私にはやらなけ
ればならない。

私は泣く泣くエロ本を片手に顔を赤らめながらこの状況を早く脱
出させたくて、急いでさっさとレジのほうに持っていった。

たまたまレジの店員は女子大生2人でやっていたみたいで私を怪
しい本を持ってきたとすぐにわかり、クスクスと笑われてしまった。
こんな本を買うということは縁がないと思っていたはずなのに…

…。私…。このまま死んでもいいかもしれない…。

第8話 『ぶつ殺す!!』

私はデュエルキングになるという夢をかなえるためにデュエル部に入ったのはいいものの何かがおかしい。

部員は少ないし、不良みたいな風潮のカイザーのために何でエロ本なんかを私は買ったんだ……。

それに部長も今はいないし、この部屋には私と宮城とカイザーと死んでいる堀内先輩だけっていうのも不思議だ。

先輩に本を買って来いと無理やり頼まれてた物を近くのコンビニで私は買い物を済ませるとすぐに部室に戻った。

「うん。お前達はなかなかいいエロ漫画持ってきてくれるじゃないか。お前らにはセンスがあるな」

「その内容は奈々川が選んだんですよ」

本を渡すと喜んだような顔で私のことを褒められたが、私は羞恥心のほうが強くて何とも嬉しくなかった。

そして余計なことをぺらぺらとしゃべる宮城。女の子の私に取ってはこの本を買うのは滅茶苦茶恥ずかしかったんだぞ！

「やるじゃねえか。正直お前らを見直したぜ」

「……。それはどうも……」

私はカイザーと名乗るように言われた部員に頼まれた本を渡すと喜ばれて、すぐに封をビリビリに開いてページを見始める。

カイザーはポケットにあった箱のような物を取り出す。そしてその中から棒のような物を出して火をつけた。タバコだ……。

未成年の癖にタバコを吸いながら漫画を見ている姿が見ていてイライラする。

「カイザー先輩。何でここの部活には人があまり来ないんですか？」

上から目線なのがいちいちムカついてくる。だけどこの人は先輩だからしょうがないと妥協するしかない…。

私は今まで感じていた疑問をカイザーに敬語で質問を試みる。

「ああ、ここの部活には元々は3人だけだったからな」

「え…？」

3人だけ…？　ここはデュエルに関しては一流の部活だっていうのに人数が少ないってのは妙じゃないか。

やっぱり宮城が言ってた通りに堀内先輩とカイザーのせいで男も女も怖がって新入生が入って来ないのが理由なんだろう。

「そこでお前らが入ってきたってことだろ。俺様はチンコばっか来ても嬉しくねえんだよ。おっぱいを連れて来いよ！」

「……」

下ネタを言われて黙り続ける私と宮城。

女が入って来てないとかカイザーは言っているが、男装しているからわからないようだけど実は私は女の子だけだね。

冗談で私は実は女だよって叫んでみたいけど、女子を狙って変なことを企むカイザーのことだから何をされるか……。

「そ、それはすいません…。じゃあ、僕達がここの部活に来たのにデュエル部は活動してないんですか？」

さっきからタバコを吸いながらまるで自分の家かのようにリラックスして、私を買って来た本を読んでいるカイザー。

ここはデュエル部だつていうのにカードを扱うということがない。デュエルしたりデッキを弄ったりするのがこの部活と思ってたのに。

「活動？ そんなもんやんねーよ。大会の時だけ頑張ればいいんだよ」

「えっ？」

あっさりと質問の答えが返ってきた。

活動している人が全くいないでぱつくりと開いたこの空間が、こんなのは私が望んでいた部活じゃないってことを思い知らされる。

宮城の言う通りにやっぱりこの部活は荒れていると聞かされた通りだったんだな…。

「そんな細かいことはいいんだよ！ そんなことよりお前らの学年で神崎ミカがいるって本当か？」

「……。本当ですけど…」

「やっぱりマジだったんか！」

渡した本のページをじつくりと鑑賞しながら私の質問をすぐに忘れてプロデュエリストの神崎さんのことを聞こうとする。

今度は何を企んでいるつもりなんだ……。

私達が神崎さんのことを話すとあの怖い感じの冷たいテンションからいっぺんして急に慌しいテンションに変わる。

「つつことは俺様を差し置いて神崎ミカの同級生か！ 許せん！！」
「そうですけど…」

神崎さんは有名人だからこんなところでもファンがいるんだなと私は改めて尊敬する。

そのファンの1人であるカイザーの表情がまるで変質者のように目が逝っている。

「もう見たのか！ 神崎ミカのこととは！」

「は、はい……」

「死ね！ サインとか貰ったのか！」

「いえ……。別に……」

さらに私や宮城の肩を順に触っていつて必死に神崎さんのことを聞き出そうとする。

私達が神崎さんと関わっていると話すとまずいかもしれない……。確実に半殺しにされるかも。

「くそーーーーー！！ 使えない1年どもが！ デュエル部に入れた意味ねえじゃん！ はあー！？」

カイザーのアイドル信者のような発言をするのが見ていて痛々しいけど、そんなこと言ったら怒られるからな……。

何故か使えないという言葉が胸に刺さって心に刻まれるのは何でだ？

「僕、あとでサイン貰ってきましようか？」

「俺様は写真集を持っているほどファンなんだよ。」

おそらくだけどカイザーは神崎ミカの狂信的な激烈な大ファンみたいなんだ。

こんな怖い容姿の奴が神崎さんのファンとは世の中わからないものだね。

「わかつているだろうな…。お前らは神崎ミカと口を聞いただけでもデュエルの大会に出れなくなるぞ」

「冗談じゃない…。私が神崎さんと付き合って一緒に住んでいるって言ったら確実に殺される……」。

私と神崎さんの関係のことは絶対に気づかれないようにしないと…。と気をつけようとしていたのに…。宮城が…。

「そういえば…。奈々川って神崎と付き合っているんじゃないかってっけか？ 家も同じみたいだし！」

宮城が私と神崎さんの関係をあっさりと軽くばらされた……。言わないようにヒソヒソ話す予定だったのに…。

それを耳で流すように聞いていたカイザーは怒りをためながら体中を震わせて…。

「奈々川……。それは本当のことか…！」

「ち、違うんです！ あれは神崎さんのほづから強引に…」

遂にカイザーの怒りが頂点に達した。

「殺す!!」
「うっ」

カイザーの堪え切れなくなった右ストレートがおもいつきり私の
お腹を殴る…。

とつさの判断に対応しきれなかった私はガードもできずに大きな
衝撃がそのまま激突した。

腹筋を鍛えてもいない女性である私は痛みを耐え切れずに、お腹
を押さえながらそのまま床に沈んだ。

「聞いてください！ 僕は嫌だったのに無理やり襲われてしまって
…！」
「死ね！」

本当のことを話てもカイザーは聞いてくれない。どうやら必死で
言い訳しているように見えるようだ。

デュエルディスクを凶器のような扱いで倒れかけている私に向か
って投げるが、私は間一髪うまい具合に避ける。

カイザーは犯罪者のような目をして本気のようにだ…。私のことを
本当に殺そうとしている…。

「付き合っているだ？ 一緒に暮らしているだ？ それは裸同士で
大事な毛を見せ合ったってことか！ ああ!!」

「カイザー…。誤解なんです！ 奈々川は……」

デュエル部に置いてあったデュエルディスクを何個も何個も私目
掛けて投げようとすると、この原因を作った宮城が懸命に謝

ろうとする。

最初は宮城の努力もむなしく狂気のカイザーは口を聞いてくれなかったが、私の本当のことを必要以上の声で何回も話すとカイザーの動きは止まった。

「なるほど…。俺様の物になる予定の神崎ミカがお前みたいな女男にほれるってことはないだろう」

「そうですよ…。僕が神崎さんと付き合ってありえない話ですし…」

ゆっくりとさっきの腹パンの痛みを堪えながら私は一呼吸ついたりあえずは一安心だ。

宮城が言ったこの騒動を止めるための一部の嘘のおかげで、勘違いだと解釈したカイザーは私に攻撃するのは止まったようだ…。
だけと…。

「じゃあ！ 神崎ミカの風呂場の動画を隠し撮りして来い！」

「はあ？」

ポカンとしばらく口を開いたまま私はカイザーの言ってることが

理解できなかった。

隠し撮り？ 女性であるからわかるけど女の子が一番無防備なところを狙って、女の恥ずかしい姿を晒されていい思いをする人なんていない。

「神崎ミカの風呂場を盗撮しろって言ってんだよ！」

「なんで!？」

「一緒に住んでいるなら盗撮くらいできるだろうが!！」

カイザーはさらに元々荒かった口調がさらに荒くなり、唾が飛びまくってるほど興奮は最高潮に達成していた。

「本来なら口を聞いただけでもお前らは死刑なんだよ！ おっばいが見れるだけで手を打つ。そのありがたみを知らないのか」

「そんなことできるわけがない！」

私だって女の子だっていうことがばれにくいからわかる。今、一番私がされたくないと思うことが盗撮されることだ。

人がされて嫌なことを何も知らない神崎さんのお風呂を盗撮することなんて私には出来っこないよ…。

「てめえ…」

反抗的な態度を取っている私の首を縛り付けながら壁際を利用して体を宙に浮かされる。

これからそこで気絶している堀内先輩のように意識がなくなるまでリンチされるといふ未来が見える…。

けど私は屈辱に負ける気がしない。男になった私には勇気があるから…。

「おい、デュエルしろよ…！」

緊迫したこの薄暗い雰囲気の中、私はこの強気で言葉を言った。

「デュエルだと？」

「僕とデュエルしろと言っているんだ！」

私の不意を付いた言葉に、カイザーは二度確認するためにもう一度発言したけど私ももう一回発言してやった。

「ほう…。この俺様とデュエルするってか？」

「ああ…。そうだよ…。デュエルの練習をしないってことは余程自信があるんですね」

「無茶だ。奈々川…。相手はデュエル部のエースカイザーなんだぞ…。お前が勝てるはずもない…」

宮城が私を止めに入ろうとしたけど、手を払って私が本気だということを理解させる。

相手は自称カイザーと名乗るほどデュエルの腕は一流かも知れない…。

でも、人間として終わっている変態な野郎に勝負を付かされるなんて一緒にの恥だ。それこそ切腹したほうがましだよ。

それに私は一度、そこで泡を吐いて倒れている高校デュエルで4位の堀内先輩に勝ったんだ。自信はある！

「ただ単純に勝負するなら賭けをしましょうか。先輩」

「今、この俺様に対してその汚い発言を忘れるんじゃないぞ！」

そこら辺に落ちているデュエルディスクを拾い上げて私は展開し

て勝負の準備を図ろうとする。

私の落ち着いて準備をしているのを確認しながらカイザーは私にさらに喧嘩腰で言葉を言う。

「お前が俺に勝てるという証拠はどこにあるんだよ？」

「僕が勝てば神崎さんのことを諦めてデュエル部もともに活動してくれると約束してくれるか？」

私が頑張ればこの部活も普通の青春に溢れたまともな部活に変わってくれると信じているからこの台詞を言ったんだ。

だから活発になって楽しい部活になって、私がデュエルキングになる道のりの為に絶対に勝つんだ！

「だがお前にも条件がある」

「何だ！？」

賭けごとだから当然負けた時にも私の罰がある。簡単な罰かと思っていたのにこのあとの発言は…。

「お前が負けたら学校中を裸で逆立ちで歩けよ。チンコ丸出しにしてな！ 神崎ミカにも嫌われる！」

「……………」

負けたら全裸で歩く条件を出されて私は少し動揺してしまった。裸を出すという行為は私が女だということがこの学園に知られてしまうこと…。それは私がデュエルキングになれないということだ。

それでも私は屈したりしないよ。強気で私は決意したことだから

な。

「その曲がった口を僕が二度と話せないようにしてあげるよ。さあデュエルだ！」

制服に隠し持っていたデッキをデュエルディスクに差し込んだ。差し込んだデッキは自動的にディスクによってシャッフルさせ、私とカイザーのライフ表示は4000となり、下のランプが点灯した。

『決闘!!』

ユウタ LP 4000

カイザー LP 4000

「俺様が先行を貰う！」

本当は私が先行を貰いたかったんだけど向こうは先輩だから仕方がないか。

意地を張っているカイザーは急いでいるようにデッキのカードをドローしたので先攻後攻を決める話合いができなかったただけなんだけどね。

「カードを3枚伏せてターンエンドだ！ 今から女みたいなお前をボコボコにしてやるから待ってる！」

「……」

私を多めな伏せカードで挑発したようだけど無駄よ。
急いで先行を取ったくせにデッキをぶん回さないってことはどう
せ事故っているんだろ。所詮はフィールドはがら空きだ。

「僕のターンドロ―！」

6枚になった手札の束を見て序盤をどう出るか一手を考える。
おそらくけど私の攻撃を誘っているように見えるのよね。罠だ
とわかっていても3枚もある伏せカードをいち早く潰すために全身
あるのみ。

「『X-セイバー エアベルン』を通常召喚！！　そしてすぐにバ
トルフェイズに移行！」

カードをメンコのような勢いで叩きつけると猫のものとは思えな
いほど長い爪を持ったモンスターがソリッドビジョンに映される。
手始めにこのカードで相手をけん制するつもりだ。このカードは
強力な効果を持っているから相手のペースを握るのに十分。

「いけ！！　『X-セイバー エアベルン』でダイレクトアタック
！！」

長い爪を生かした攻撃でカイザーに飛び掛ろうとしている。この
攻撃が通れば大きなアドバンテージが取れる！！

「ノーガードだ！」

「!？」

カイザー LP4000 2400

『エアベルン』の爪がカイザーのデュエルディスクを切り裂いた。伏せカードが3枚もあつたのに防げない…？ あんなに強気で私のことを見下していたのに全てブラフだったなんて…。

でも、これで『エアベルン』の効果が発動する。これで私の勝利に大きく貢献するのだから。

「『エアベルン』の効果発動！ このカードが戦闘によつて相手にダメージを与えた時、相手プレイヤーの手札をランダムに捨てさせる！」

「めんどくさいから早くこつちに来いよ！ 選ぶんだろ！」

どうしてなのかわからないけど手札をハundsされるってことはデュエリストでは不快なことなのに、カイザーは落ち込む様子もない。

それなのに平然とした態度で私に堂々と手札を向けてくる。だから私はカイザーの手札のカードを3枚の中から選んでやった。

「さあ何を選んだんだ？ そのカードの名前を言ってごらん？ ヒヒヒ！」

私は選んだカードを見て驚愕した。何で……。何でこのカードが……。

「俺様の切り札をわざわざ捨ててくれるなんてな、なんとありがたいんだろうな。感謝するぜ！」

「くそっ！」

切り札を捨てたのに悔しがる私の姿を見て宮城が疑問に思っている。

このデュエルモンスターズ界で一番捨ててはならないカードだったんだから……。そう…。手札から墓地に送られた時に効果を発動する暗黒界。

「お前が捨てたのは『暗黒界の龍神 グラファ』。このカードが手札から墓地に捨てられた場合、相手のカードを強制的に破壊！ さらに相手によって捨てられた場合は相手の手札をランダムに見てそれがモンスターだったら特殊召喚できるんだぜ！」

手札の『グラファ』を引き裂いた『エアベルン』を返り討ちにするかのように、墓場から不気味な色をした龍のモンスターが巻き込んだ。

さらに追加効果として私の手札のカードを見られる効果を持っている。私がカイザーにやったときのように、私も手札をランダムで選ばなければならない。

しかも暗黒界を使用するカイザーと違って私には対策なんてない…。だから今度は相手の思う壺…。

「ちっ…。なんだよ…。はづれかよ…。まあいいか…」

ランダムに選ばれたのはモンスターカードの『XX-セイバー
フォルトリール』。

幸いにこのカードはXセイバーが2体以上いなければ特殊召喚で
きない条件モンスターだったので相手に特殊召喚されるということ
はない。

けれども…。情報アドを取られる羽目になってしまった…。

「…。くっ…。僕は手札のカードを2枚伏せる…。これでターンエ
ンド」

私は伏せカードと共に並べる。モンスターがいないってことは今
度は私がダイレクトアタックの危機に迫られる。

ユウタ

LP：4000

手札：3枚

場：モンスター

なし

魔法・罫

伏せ2枚

カイザー

LP：2400

手札：2枚 3枚

場：モンスター

なし

魔法・罨
伏せ3枚

「俺様のターンいくぜ！『暗黒界の狂王 ブロン』！ 通常召喚だ！」

私を攪乱するように手札をパチパチと音を立てながらカードをプレイさせる。

現れたのは人間の容姿をしているのに首が異常なまでに曲がっている骸骨顔のモンスター。

「僕はこの瞬間伏せてあった『月の書』を発動させるよ！ 効果により『ブロン』を裏守備表示に変更！」

活発に動いていたソリッドビジョンも裏守備という表示になればそのビジョンもカードの裏側を表したものになる。

普通ならばできるだけ温存して相手の攻撃時に発動したほうが得なのだが、暗黒界相手では違う解釈が取れる。

「僕が墓地に送った『暗黒界の龍神 グラファ』はフィールド上の暗黒界と名の付いたモンスターを戻すことで墓地から特殊召喚できる強力カード。でも、そのカードは表じゃないと召喚条件を満たせないんだよ」

「こいつ！！ 俺様の動きが読まれているだと！！」

私は一生懸命勉強した知識があったからこそ、このプレイングが取れたんだ。デュエリスト同士ではカードの知識が多いほど有利だ。予想外の展開でカイザーは慌てて今ある手札のカードで何とかし

ようとするけど手札のカードは動く気配はない。

この手札では今のターンは動くことはできないみたいね。

「ちっ……。しかたがないが俺様はこのままターンエンドだ！」

「僕のターンドロー！『XX-セイバー フラムナイト』を通常召喚」

私は守備表示になったことで戦闘を簡単に破壊できるチャンスに、金色の髪をした可愛い目をした剣士を呼び出す。

そしてすぐに相手の伏せを警戒せずにバトルフェイズに入る。

先ほど『エアベルン』にライフを大幅に削られたとはいえ、初期ライフが4000しかないこの世界では守らない方がもったいない。アドバンテージの次に大事なのはライフなのだから。

「『フラムナイト』でそのセットモンスターに攻撃だ！」

小さいモンスターが得たいの知れない裏のカードに飛び掛っている。もちろん私はそのカードは『月の書』で裏にしたカードだと知っているけど。

伏せカードもやっぱり発動せずに普通に通った。裏になっていた『ブロン』はそのまま戦闘破壊されていく。

「そして『フラムナイト』の効果だよ。墓地のXセイバーを蘇生だ！もう一度僕の前に現せ！！『X-セイバー エアベルン』」

墓地から呼び寄せるのはさきほどハンデスに成功したモンスター。

さっきやったようにハンデスしたいけれども…。
私のやることは…。

「僕はメインフェイズに移行するよ」

「何びびってんだよ！ 攻撃するんじゃないのか！？」

攻撃をせずにまっさきにメインフェイズ2に移行するとカイザーは私を刺激させてきた。やっぱり手札には暗黒界がまだいるのか…？ 私の攻撃をまた誘っているように見えるんだよね…。下手に暗黒界相手にはハンデスするのは相当勇気がいる。

この攻撃が通ってれば相手のライフを800まで追い込むことができたのだけれども暗黒界は相手にハンデスされると効果が凶悪になるから…。

「僕は手札から『フォルトロール』を…」

でもこれで場にXセイバーが2体そろった。どうせならさっき『グラファ』で見られた『フォルトロール』を出して展開するべきだな。

私が手札の一番右側にある『フォルトロール』に手を掛けようとした次の瞬間…。

「させないぜ！ 『マインドクラッシュ』！」

「え…っ！！」

通称『マイクラ』。カード名を宣言することでその宣言したカードが相手の手札にある場合に全て捨てさせることが出来るカード。

このカードの発動によって私が狙っていたプレイングが大幅にずらされてしまうことになる。

さっきまで有利だった私だったけれどもここから相手の反撃が始まるうとしている。そしてカイザーの持つ暗黒界デッキの恐怖を知ることになる。

ユウタ

LP：4000

手札：3枚

場：モンスター

XX - セイバー フラムナイト

X - セイバー エアベルン

魔法・罫

伏せ1枚

カイザー

LP：2400

手札：2枚

場：モンスター

なし

魔法・罫

伏せ2枚

マインドクラッシュ（XX - セイバー フォルトロールを宣言）

第9話 『暗黒界攻略の鍵は無限ループ!?』

ユウタ

LP：4000

手札：3枚

場：モンスター

XX - セイバー フラムナイト

X - セイバー エアベルン

魔法・罫

伏せ1枚

カイザー

LP：2400

手札：2枚

場：モンスター

なし

魔法・罫

伏せ2枚

マインドクラッシュ（XX - セイバー フォルトロールを宣

言）

「『マインドクラッシュ』の効果で『XX - セイバー フォルトロール』を墓地に送らせるぜ！」

「……」

「ざまあねえな！」

先ほど『暗黒界の龍神 グラファ』の効果で公開されたカードで反撃しようと考えは甘いようだった。

相手に知られているのカードはやはり簡単に対策されてしまうのがオチのようだ。

私は納得いかないショックで無言のままカイザーが宣言したカードをゆつくりとデュエルディスクの墓地のゾーンに置いた。

「これで終わりじゃねえだろうよ！！　あとのカードを全部見せやがれよ！」

「何でだよ！　これで処理は終わりでしょ」

「不正がないか確認するためだ！　もう1枚隠れている可能性もあるだろ！　いいからよこせ！」

「っ！！」

『マイクラ』の確認のためとはいえカイザーは怒ったかのような表情で私の手札のカードを雑に奪い取られてしまう。

「『リビングデッドの呼び声』に『XX-セイバー　エマーズブレイド』か……。うん……。『エマーズブレイド』はともかく、この中で『リビングデッド』が一番うざってーな」

「……」

カイザーはじつくりと私の手札をじーつと見つめながらいろいろとカードの感想を言ったことがむかつく。

デュエリストとあるものは、手札のカードを全てばれるという行為は丸裸を全て見られるくらいに恥辱なもんだよ。

「もういいでしょ！　いいから返して！……」

「焦るなよ。バーカ！　そんなに俺様に見られるのは嫌か？」

2枚しかないのに長い時間私の手札を見ながら手札を見ているから、もういいだろうと勝手に解釈した私は手札を無理やり奪い返し

た。

私は伏せカードをセットせずにターンエンドの宣言をする。伏せない理由はピーピングされたあとに伏せるとなるとそのカードは相手にバレバレだから出来ない。

「おつと……。俺様はエンドフェイズに『暗黒界に続く結界通路』を使用するぜ！ このカードにより自分の墓地の暗黒界と名のつくカードを特殊召喚できる。再び俺様の前に来い！ 『暗黒界の狂王ブロン』……！」

このターンに戦闘破壊した首の曲がった骸骨の戦士がフィールドによみがえった。

「俺様のターン！ ドローといこうか！ 前のターンでは邪魔されたがこれでようやくあいつを呼び出せるんだからな！」

手札をドローしてカイザーはまるで『ブロン』のようにボキボキと首を鳴らしながらゆっくりと私の顔をじつとみる。

奴の狙っているのは明らかに私のターンに防いだカード……。

「『ブロン』を手札に戻すことでこのカードは特殊召喚できるチェインに乗らないルール効果だ！ 現れる！ 『暗黒界の龍神 グラファ』……！」

「……。僕は召喚時には何も発動しないよ」

ゴゴゴと渋い効果音と共に地面から悪魔の顔を被った龍がブロン

を持ち上げて特殊召喚される。攻撃力2700…。

もちろん今の私にこの召喚を止める方法などない。この召喚はアドバンテージを失わずに狙える…。なんて恐ろしいカードなんだ。

「そして今、戻した『ブロン』を手札から召喚！ 俺様はバトルフェイズに入るぜ！」

しつこいようだけど3回目の『ブロン』が登場する。この召喚のあとにカイザーはバトルフェイズ移行のスイッチを押した。

「『グラフア』で『フラムナイト』に攻撃だ！」

「させない！ 『フラムナイト』の効果発動！ 1度だけ攻撃を無効にする！」

カイザーが私の方面に指を指すと龍神が紫色の黒炎を『フラムイト』に向ける。

小さい剣士でありながらも持っている小剣を振り回し三角形の紋章を作ると結界のような物を出して炎を防ぐ。

「でも『ブロン』の攻撃が残っているぜ。『フラムナイト』に止めをさしな！」

フィールドにいるときに1度しか使えない効果を使い切ったためこの攻撃は伏せぐことは私はできない。『フラムナイト』はそのまま破壊される。

ユウタ LP4000 3500

「さらさらに！ 相手に戦闘ダメージを与えた時に『ブロン』の効果発動だぜ！ 手札のカードを1枚捨てることができるんだよ！」

「僕のライフを削るより『ブロン』の効果を優先したのか！」

攻撃力が高い『グラフア』を囷にさせることで『ブロン』の発動条件を満たすことに狙いがあったようだ。

そして効果によって『暗黒界の武神 ゴルド』が墓地に送られる。

「そして、そして！ 『ゴルド』は手札から墓地に捨てられた時、フィールドに特殊召喚ができるんだぜ！ これでさらに追い詰めてやるよ！ 喰らうがいい！」

黄金に輝く武装した悪魔がフィールドに姿を現す。このことからカイザーは僕のライフを狙うよりボードアドを重視したってことかな…。

「まだバトルフェイズは終わってない！ 俺様は『ゴルド』で『エアベルン』を攻撃——！」

バトルフェイズでの特殊召喚ってことはこのカードでさらに私を追い込めるために反撃をするつもりだな。

この攻撃を私はそれを止めるべくセットカードに手を付ける。

「僕はトラップカードをオープンさせる！ 『身剣一体』を発動！」
「見かけないカードだな？ 何だ？ それは？」

カイザーは『身剣一体』の効果がわからないようなので私は説明をしてあげる。

テーマデッキのマイナーカードはあまり知られていないようなのかな…と私は心の中で落ち込む。

「『身剣一体』は自分の場にXセイバーが1体しか存在しない場合

に発動できるカード。これによって『エアベルン』の攻撃力を800ポイント上げるよ」

「ちっ…。これじゃあ攻撃力上回ってしまったじゃねえか…！くっそったれ…！」

Xセイバー	エアベルン	攻撃力1600	2400
カイザー	LP2400	2300	

攻撃力を1000だけ上回った『エアベルン』が『ゴールド』を粉砕して返り内にした。

舌打ちをしながらカイザーは壁を大きな音が出るように叩いていることから、作戦通りにうまくいかなかったことを意味する。

「しょうがないか…。まあいい…。じゃあ俺様はこのままターンエンド」

仕方がないと諦めてすぐに機嫌を直すとターンエンドを宣言した。さあ、私のターンだ！

ユウタ

LP:3200

手札:2枚 3 4 (リビングデッドの呼び声とXX-セイバー

エマーズブレイド)

場 :モンスター

X-セイバー エアベルン（攻撃力2400）

魔法・罫

身剣一体（エアベルンに装備）

カイザー

LP：2300

手札：2枚

場：モンスター

暗黒界の龍神 グラファ

暗黒界の狂王 ブロン

魔法・罫

伏せ1枚

カイザーのフィールド上のモンスターに少々驚きながらも、ドロ
ー加速によって手札が増えた私はこの展開を打破する方法を考える
必要性がある。

「僕のターン！ドロー！『エアベルン』で『ブロン』に攻撃だ！」

「ノーガードだよ！ ちっ！」

まずは『身剣一体』の効果でさらなる手札を増やすためにとメイ
ンフェイズ1を飛ばして攻撃宣言に入った。

舌打ちをまたしてイライラしているけれどカイザーはこの攻撃は
防がなかった。いや、防げなかったというべきか。

カイザー LP2300 1700

「『身剣一体』の効果でワンドロー」

私はカードの処理によってデッキの上に手を掛けてカードを持っている手札の束に加える。

「さらに『エネミー・コントローラー』を発動。1つ目の効果を使い『エアベルン』をリリースして『グラファ』をコントロールを僕の元へ移動させる！」

「チンコ小さい癖にいちいちマチャマと動きまくりやがって…」

そしてゲームのようなコントローラーのカードを使用させて『グラファ』に配線を指すとそのまま移動して私のカードのように扱った。

「これでとどめだ！『グラファ』でダイレクトアタック！」

この攻撃が通れば私は勝てると勝利への希望を持って勢いよくカイザーを指で指名する。しかしそう簡単につまきいくはずもなく…。

「これで終わりだと思ったのかよ…。手札から『バトルフェーダー』の効果発動！」

手札から鐘の音色が部室に鳴り響くと私のモンスター達は攻撃する目付きをやめて大人しくなった。

「…。僕はモンスターを1枚セット。そしてリバースカードを2枚伏せてターンエンド…」

「だがな！これで俺様の『グラファ』を返してもらおう！」

とどめをさせなかった私は少々落ち込みながらも持っているカードを大量に伏せて守りの姿勢に入ろうとする。

ここで処理しきれなかった『グラファ』をエンドフェイズ時に持

ち主に戻す行為はかなり痛い。

「ドロー。セットしてあった『強欲な瓶』を表にして1枚ドロー。そして『暗黒界の門』すぐに発動だ！ このカードが存在する時、フィールド上の悪魔族モンスターの攻撃力は300ポイントアップするんだぜ」

やはり先行で伏せてあったカードはブラフであつたか…。

フィールド魔法が発動されるとカードで溢れているデュエル部の景色が一変して、部室の中央に大きな黒い門のビジョンが映し出される。

暗黒と名のつくことだから実際は綺麗なもんじゃないよ。それでもこの景色が決闘の舞台としてのやる気が出てくるけど。

「『暗黒界の門』の効果！『ゴールド』を除外！『暗黒界の術師 スノウ』を墓地に捨て1枚ドロー！そして『スノウ』は捨てられた時、デッキから暗黒界と名のついたカードを持ってこれる！ 俺様は『暗黒界の雷』を持ってくる」
「くっ…」

カードを次々と入れ替えてくるカイザーの行為は細かいだろうけど確実にアドバンテージを稼いで私に重い一撃を与えようとしている。

私にこの展開を防ぎきれなのだろうか…。

「『暗黒界の雷』発動！俺はその目障りな裏側のカードを破壊だ！」

「…つまり…」

大きな雷が私のセットカード目掛けて降り注いだ。カイザーが選択して破壊されたカードはモンスターカードだった。

「っっはっは…。お前の伏せカードは1枚は『リビングデッドの呼び声』なんだろう！バレバレだっっの！『エマーズブレイド』を破壊だ！」

満足気味の声で私に言い聞かせる。けど…。そのカードは…。

「残念だったですね。先輩！」

「なんだと…！」

「先輩が破壊したのは『XX-セイバー ガルセム』。リクルーターである『エマーズブレイド』を破壊しようと思んでいるということとはわかった。だからこのカードをわざわざ選んで伏せたんだ」

この狙いはわかっていたんだ。『マインドクラッシュ』でわかっているからこそカイザーは私のセットカードの『エマーズブレイド』を伏せるだろうと…。

多少ためらうプレイングだったけれども私の細かいフェイクを使っつてうまく騙せたみたいね。

「『ガルセム』の効果でカード効果で破壊された時にXセイバーをデッキから手札に加える」

デッキの束をデュエルディスクから取り出して『XX-フォルト

ロール』を考える暇もなくめくって選んだ。

さつき『マインドクラッシュ』で見事に捨てられちゃったけどXセイバーデッキにはこのカードはキーカードだから。

「でもなー。そんな余裕がお前にあるのかよ！『雷』の効果で手札を1枚捨てる。そして『暗黒界の狩人 ブラウ』が墓地に送られた時、デッキからカードを1枚ドローできる効果があつてな！ハハハ。これでお前を守るモンスターはいなくなつたつてことだよ。バ―カ！」

カイザーは再び手札をドローする行為を取る。

「俺は『グラフア』でダイレクトアタック！」

「うわあああああああ」

無に等しい私のフィールドに直接『グラフア』のソリッドビジョンである火炎がモロに受ける。

ユウタ LP 3200 200

「虫の息つてことか？俺はカードを2枚伏せてターンエンド！」

何とか耐え切ったけれども残りライフは3桁しかない…。まずい…。

『リビングデッドの呼び声』で『フラムナイト』を呼んでこの攻撃を防ぐという選択誌もあつたけれど、まだ持ちこたえると思つたから使わなかつた。

でもライフ3000も失うつてことはもつたいなかったかもしれない…。

ユウタ

LP：200

手札：2枚 3枚（X・セイバー エマーズブレイドとXX・セイバー フォルトロール）

場：モンスター

なし

魔法・罫

伏せ2枚（1枚はリビングデッドの呼び声）

カイザー

LP：1700

手札：1枚

場：モンスター

暗黒界の龍神 グラファ

バトルフェーダー

魔法・罫

暗黒界の門

伏せ2枚

「僕のターンドロー!!」

カイザーに少しずつ追い込まれていく私は焦りを感じながらも、
なんとしてでも手札のカードと睨めっこしながら勝ち筋を探してい
く。

長期戦に持ち込むほど不死身の『グラファ』により少しずつアド

バンテージの差が開いていくから何としても速攻で勝たないとまずい気がする…。

「なかなかいいカードを引いたな。僕は『大嵐』を発動！」

今、引いた『大嵐』を利用してこれであいつのガン伏せを全て吹き飛ばせると思っていたが…。

「これを通すわけにはいかない！『魔宮の賄賂』！魔法・罾の発動を無効に破壊する！でもお前はそのおまけとしてカードを1枚ドローできる！さあ引きな！」

厄介な『門』と見えない伏せカードを飛ばすのは無理だったけれども僕はカードをドローできる。

手札を増やしていくと共にこのあとの展開をじっくりと考える。

「『X-セイバー エマーズブレイド』を通常召喚…。さらに墓地の『XX-セイバー フラムイト』を選択して『リビングデッドの呼び声』を発動！」

複数の手で剣を持った昆虫の剣士とカイザーにばれてある伏せてあったカードを使ってさらなる展開をこころがける。

「さらに自分の場にXセイバーが2体以上存在するから『XX-セイバー フォルトロール』を特殊召喚！そして効果起動！」

「させるかよ！ライフを1000ポイント払って『スキルドレイン』発動だ」

カイザー LP 1700 700

効果を無効にされてしまった…。けれどもこれでカイザーは1000ものライフを失ったってことだ。

「けどまだ僕は展開できる！レベル6の『フォルトロール』にレベル3の『フラムナイト』をチューニング！ 剣の主の王よ。我が元に降臨して巨大な剣を抜け！シンクロ召喚！現れる『XX-セイバー ガトムズ』」

「攻撃力3100だと！！」

「暗黒界の弱点は『グラフア』に頼りつきりってことだ。攻撃力3000以上のモンスターを出されると反撃できなくなるってこと」

私はシンクロ召喚をして切り札である『グラフア』の攻撃力より100だけ大きい総司令官を呼んだのだ。

『スキルドレイン』で効果は発動できなくても、この効果は暗黒界相手では無意味なんだけどね。攻撃力が高いってことに意味がある。

「『ガトムズ』で『グラフア』に攻撃！」
「ぐわあ」

カイザー LP700 600

『ガトムズ』は自分の身長以上もあるうかという剣を軽々と持ち上げて黒い悪魔の龍に切りかかり粉碎した。

「そして『エマーズブレイド』で『バトルフェーダー』を攻撃！カードを1枚セットしてこれで僕はターンエンド」

さきほど大きく邪魔されたカードを倒すとこのままこのターンを終わりにする。

今、伏せたカードは『ガードブロック』。低い攻撃力を晒した『エマーズブレイド』の戦闘ダメージを0にして次のターンに繋げる…。

これで次のターンをしのいでこのまま勝ちに繋げるといふ勝ち筋が私にはあるんだよ。

「俺様のターン！ ドロー！ 『暗黒界の門』発動！ 墓地の『ブロン』を除外してこのカードを捨てるぜ！」

破壊できなかったカードを利用してさらなる手札増強をするカイザー。

次に捨てた暗黒界は何であろうと簡単に『ガトムズ』が突破されるはずがないと言い聞かせていたはずだったんだけど…。

「っ！ そのカードは2枚目の…」

「お前は言ってたよなー。暗黒界は『グラファ』頼りすぎのデッキってな…。確かに『グラファ』頼みだけでもこれならどうだよ。俺様の運はまだまだいけるってな！」

私は捨てたカードを見て圧倒的なカイザーの力の前に凌駕する。

「そうだ！ もう1枚の『グラファ』だよ。1枚ドローして『グラファ』の効果で『ガトムズ』を破壊だ！」

2枚目の『グラファ』が落ちて私の希望であった『ガトムズ』が『グラファ』と共に道連れにされて破壊されてしまう。唯一の私の

希望が…。

「次は『暗黒界の尖兵 ベージ』を召喚してこいつを戻し『グラフィ』を特殊召喚！ さらに『死者蘇生』を発動して墓地の『スノウ』を出して『グラフィ』を呼び戻す！」

『グラフィ』の召喚コストとして次々とモンスターが手札に戻って一気に2体も並んだ…。

アドバンテージを失わない召喚方法…。こんなことって……！

「これで終わりだな！ お前は大人しく罰ゲーム通りに全裸で学校を逆立ちで歩くってことだ！『グラフィ』で『エマーズブレイド』に攻撃！！」

忘れていたけれどもこの決闘は罰ゲームを掛けたデュエルだったんだ…。

このデュエル部の未来と私のデュエルキングになるという精神から決して負けてはいけない戦いだっただということ…。

「『ガードブロック』の効果発動！ 1度だけ戦闘ダメージを無効にして1枚ドローできるんだ！」

予定は狂ったが前のターンに予測していた攻撃を防いだ。私はまだ戦える…。次のターンで何とかすれば…。

「そして『エマーズブレイド』の効果で再び『エマーズブレイド』を守備表示で呼び出す！ これならまだ数ターン耐えることができる！」

リクルート効果で同盟カードを呼び出したけれども所詮は時間稼

ぎにしかなくてない。このままだと少しずつ敗北に向かっていつて
る。

「だが持ちこたえたところで不死身の『グラファ』の布陣は簡単に
突破できない！　これでターンエンドだ」

私は目をつぶってデッキのカードをドローしながら勝てる手段を
思考する。

1枚のある伏せはずっとセットしてあった『レインボーライフ』
だからまだデュエルは遅延できるから負けるってことはない。

そこで隙を見て逆転を探るといふプレイングでは駄目だ……。カイ
ザーの場にある『スキルドレイン』と何度でも復活する『グラファ』
が私の逆転の糸を邪魔する。

ではどうすれば……。

ユウタ

LP：200

手札：0枚 1 2枚

場：モンスター

X-セイバー エマーズブレイド

魔法・罫

伏せ1枚

カイザー

LP：600

手札：2枚（暗黒界の術師 スノウ 暗黒界の尖兵 ベージ）

場：モンスター

暗黒界の龍神 グラファ×2

魔法・罫

暗黒界の門
スキルドレイン

最後の最後で引いた手札のカードを見ただけでも直接的に600の命のカイザーを止めを指す手段はない。

けれどもなかなかいいカードを引いたんだ。初めてやるけど、これから私は面白いことを思いついたからこれに挑戦して見る……。

「『おろかな埋葬』を発動！ 効果で僕は『X-セイバー パロム口』を墓地に送るよ」

「いまさらそんな屑カードを墓地に送っても無駄だ」

確かにカイザーから見れば何の価値もないカードかもしれない。しかし私にとっては憧れの不動遊星と同じ考えでこの世には必要なカードなんて存在しないってことを思い知らせてあげるから……。

「『エマーズブレイド』を攻撃表示に変更して『グラフア』に攻撃！」

「血迷ったか！ それでは自爆だ！ 俺様に勝てないからってサレンドーを選ぶより死を選ぶというのか？ 自滅しても俺様の言った通りに別は受けるんだぜ」

カイザーは私の読めない予想外な動きに驚きを隠せない。この特攻によって普通ならば私のライフは0になる。

この特攻もあるカードと組み合わせることで強力なコンボに化けることとなる。

「手札を1枚捨てて『レインボーライフ』発動！」

「何をするつもりだ！」

「このカードが発動したターン中に受けるダメージは全て無効になってその数値分回復することができるカード。これによってこの特攻は2700ライフポイント回復」

ユウタ LP 200 3000

ソリッドビジョンである苦しみダメージは癒しに変わり私の体を包む。これによって大幅にライフポイントが動いた。

「『エマーズブレイド』の効果でXセイバーと名のついたモンスター『パロムロ』を呼び寄せる。そして先ほど墓地に送った『パロムロ』の効果発動！他のXセイバーが墓地に送られた時、このカードは500ライフポイントを支払うことによって墓地から特殊召喚できる」

ユウタ LP 3000 2500

「『スキルドレイン』は墓地の発動は無効にはできないのを裏目にとったか…。だが、いくらモンスターを並べようが無駄だぞ！」

確かにカイザーの言う通りにいくらモンスターの数を増やそうが相手の布陣を突破することはできない。

それでもなお私のターンは続くんだ！もっともっとこれから長いターンがね…。

「『パロムロ』で『グラフア』を攻撃！」

「また自爆か…！」

ユウタ LP 2500 5300

もう1度特攻をして『レインボーライフ』によって大量に回復した。

初期のライフ4000が可愛いと思えるほどに、今まで私がピンチだったという面影すらない。

「そして『パロムロ』で『グラフィア』にアタック！」

ユウタ LP5300 8100

「『パロムロ』が戦闘破壊されたことにより再び墓地の『パロムロ』の効果発動！ さらに蘇った『パロムロ』でもう1回『グラフィア』に攻撃して！」

ユウタ LP8100 7600 10300

「まさか…」

私がつさに思いついたコンボに衝撃だったカイザーは思わずこの言葉を口にした。

「そうだよ。これは無限ループコンボだ。それもライフポイントが無限に回復するという超絶コンボ。止められないはずと続くん
だ」

私は永遠に『パロムロ』のループによってライフポイントを少しずつだが地道に増やしていく。

デュエル部が挑む本来の大会ならば1ターンの制限は3分と決まっているけど、これはフリーデュエルだからルールは定まってい
ない。

だから私はこのコンボを永遠に続けることができるんだ。私はル
ープを途切れぬよう、ライフポイントをずっと回復させた。

ユウタ	LP 10300	9800	12500	12000
14700	17400		

ユウタ

LP : 892600

手札 : 7枚

場 : モンスター

X - セイバー パロムロ

魔法・罫

伏せ5枚

カイザー

LP : 600

手札 : 6枚

場 : モンスター

暗黒界の龍神 グラファ ×3

暗黒界の尖兵 ベージ

魔法・罫

暗黒界の門

スキルドレイン

伏せ3枚

「すげえ……。何が起きてんだよ……。俺、ライフが十万超えているの

を見るのなんて生まれて初めて見たよ…」

このデュエルをずっと見ていた宮城はこの状況を見て感激する。
ありえないライフを見て思わず噴出しそうになっていたけれど。

「僕はこれでターンエンド。手札宣言によって僕は6枚になるように捨てるね」

「いくら攻撃してもお前のライフは全然削れる気がしない…。雑魚の癖に…」

あれから無限ループを続けてから1時間くらい経過した。
私のライフは十万を超え、まるで別次元のカードゲームというかなのような数値になった。

カイザーの『グラファ』3体の鉄壁に反撃する手段がない私はただひたすら『パロムロ』を使って永遠に守りを固めるのみ。

勝負は永遠につかないと思うのだけど私には勝てる自信がある。
なぜならカイザーは『暗黒界の門』を使ってドローを大量にしているために、私よりデッキは数枚だけ少ない。

ずっとこの状況を覆す動きが何も起きずにターンが経過してくれて、このままずっとやり過ごせばデッキ切れで勝負がつく。

「『暗黒界の取引』を発動。効果によってお互いに1枚ドローしてお互いに1枚捨てる」

「どうぞ。チェーン発動はないよ」

このターンもカイザーはひたすら普通の人が削れ切れないライフを削ろうと焦ってプレイしているけれど所詮は無駄だな。

無駄だと思いつつも『暗黒界の取引』を私は通す。私とカイザーは『暗黒界の取引』の処理でカードを捲っていかないカードを捨て

る。

これによって私のデッキは5枚でカイザーのデッキは1枚になった。もうすぐでカイザーのデッキが0枚になって勝負がつく。

デッキが0になったプレイヤーはいくらライフがあるうかと負けになるという強制ルールがある…。

「『手札抹殺』発動！」

と、思っていた私は油断した。こんなカードが飛んでくるなんて思い付いてもいなく対策もない私は驚愕した。

「このタイミングで『手札抹殺』…！？」

「さあお互いに手札を全て捨ててその枚数分だけドローするんだぜ」

私の手札は6枚。カイザーの手札は5枚を捨てたからその分だけドローすることになる。

「デッキがない…」

「俺様もデッキがないなー」

お互いにカードをドローする。お互いにデッキも少なかったから2人はデッキのカードは足りなかった。

カイザーは棒読みでデッキがないことをアピールする。『グラフア』で殴り勝つんじゃないくて『手札抹殺』を引くまで耐えるのが本

当の理由だったとは…。

「お互いにデッキがなくなってことは…」

「俺様は納得いかないが引き分けてことだなあ…。無限ループなんてふざけたことしやがって！」

私とカイザーのデュエルはお互いにデッキをなくしたことで引き分けた。

これがデュエル部のエース、カイザーの実力か……。

第10話 『風にたなびく少女』

ここの部活のデュエル部エースとのカイザーの決闘は結構惜しいところまで行つたのに引き分けだった。

かなり悔しい…。勝つたわけでも負けたわけでもないからカイザーとの私の強さのランクが同じってことを考えるとムラムラする。

「正直お前はチンコ小さそうに見えるから、威勢がいいだけの大男野郎だと思つていたけどなかなか面白い奴だったな。気に入ったぞ」「どうも…」

普通の顔をしてデュエルの中もカイザーはしつこくチ　コ…チ　コ…という単語を連呼するのが、

さつきからずつと耐えていたけれどもそろそろ限界だ。乙女である私は生理的に引いているくるんだよ！！

何で男の人ってこういうシモネタばっか言うのかしら…。全く持つて理解できない。

「おおおー。あのカイザーにこり押しして引き分けなんて相当ないぜ！！　奈々川やったな！！　無限ループコンボを決めたときすごかったぜ！」

ずつとここで私のことを応援していた宮城はこのデュエルに歓迎して喜んでくれた。

はしゃぐ宮城の姿をジト目で見ながら、カイザーはボロボロの学ランからタバコを取り出しながら一言、

「お前は俺様の子分にしてやるよ！ 感謝しろよな！」

子分？ 怖い不良に言われると返事の返し方が意味わかんないんですけど？

そういえば集中すぎて忘れていたけどデュエル前の賭けごと忘れているよなあ…。

神崎ミカを盗撮だとかデュエル部の練習を復帰させるとかいう内容だったけど引き分けだったからどうなるの？

そんなことを一切忘れてカイザーは新入生の私達になれて落ち着いて私が買って来たエロ本の続きを見続ける。

部活はやらないと駄目だろ！…。と言いたくてもヤクザのチンピラみたいな風潮のカイザーに言えるわけもないしなあ…。

男装しての学校生活の課題、私が学校生活を送るための寢床、自分が目指す目標のためにこれから頑張る部活動などといった問題を次々とクリアしていった私。

これなら充実したリアルが満喫できると思った矢先に今度は新たな問題が発生することになる。

「今日は昨日話をした通りに身体検査とスポーツテストを行います。最初は体操服に着替えてからグラウンドに出て50メートル走や反復横とびなどといったスポーツテストを…」

いつも通りの学校。そしていつも通りの私の担任の渋い白髪頭の
今日行われるスポーツテストのこと先生のお話。

「50メートル走は負けないから勝負しろよ!!」

「私、絶対太ったから体重計に乗るのやだー!!」

「そこっ！ 静かにしろ!!」

と、いった一般性との私語。ここまでは私が中学校の時と同じ様に
学生らしい会話だ。

今日はデュエルについての勉強はなく、代わりに行われるスポーツ
テストのことを私は楽しみにしていた。

だって体育はデュエルの次に私は好きなものなんだよ！

男は女と違ってスポーツテストの評価は厳しめに付けられるけど、
優秀な評価を取れば賞状をもらえるんだよ！

これは賞状目指して頑張るしかないよ！

「スポーツテストが全て終わったら今度は身体検査を行います。
男子と女子は共に体育館で身長と体重を計ります」

次に身体検査のこと担任の先生は話を続ける。

今までみたいにここまでは普通に大人しく私は耳を済ませていた
からここまでは問題ないんだけど…。

「体重と身長を計り終えたら別室で男子女子ともに下着を脱いで
着替えてそれぞれ別々の保健室にいくように！」

下着を脱いでと聞かされて反射反応で身体がギクツとしてしまっ
た。

話をさらに聞いていくと内科検診があるからしょうがないといった内容。

女子ではなく男子と偽っている私はこれはまずい！！

「男子は上半身裸で待機してください。女子は中に入っていていいといわれるまで脱がないでください」

私が上半身裸…。こんなありえないよ…。うう…。
上を脱いで女房がある私が待機中にずっと男子全員に晒すってことになる…。

うわああああああ。これじゃあ女だっていうことが男全員にばれて大変なことになるよ！

羞恥心と私のこれからの学校生活に支障が出るってことになる…。
こんなの無理だよ…。

そしてさらに追い討ちをかけるかのように、私の隣の席に座っている男子3人組みがヒソヒソ話をしている。

それも…。エッチな会話…。

「（いいなー。内科検診って医者って女のおっぱい見放題じゃないかよ！　ちくしょー！）」

「（隣の保健室ってことは俺らは見れないんだぜ…）」

「（ふふふ…。女子はブラジャー外すってことはチャンスだよ！）」

「（…。何がチャンスなんだよ？）」

「（だって下着を外すってことは、体操服の上で直接地肌で着ているってことだろ！　女子が保健室に行くまでに胸ポチとか見れるかもな）」

「（それに気が付くとはお前は天才か…）」

……。もういやだ……。このまま帰りたい……。この人達に裸を晒したら、私は確実に狙われる……。やっぱ男の人ってみんないやらしいことばっか考えているのね……。

何だかんだいって、50メートル走、反復横飛び、幅跳び、握力測定などといった競技を次々とこなす。

スポーツテスト、身体測定と次々とこなしたけれども問題はこれからだ……。

女子は別だけど、男子は再び教室に戻ってきてみんな着替えを始めている。これから内科検診といった人生最大の難関が待っている……。

「奈々川は身長いくつあった？」

「159.3センチ……」

「わーい！ 俺の方が大きいー！」

次に行われる内科検診の恐怖から心臓バクバクで破裂しそうな私は、宮城のどうでもいい質問を軽く返す。

「そろそろ体操服の下の特シャツを忘れないうちに脱いだほうがいいぞ。保健室に入ってから脱ぐのは面倒だから早めにしたほうがいいよ」

「……」

一番言われたくない台詞を私に指摘される。わかってるけどどうしようもない私…。

「脱がないのか？」

「寒いからなかなか脱げないんだよ…」

「はあっ？ もう冬は終わって今は春なのに…。寒がりなんだない。奈々川は」

適当なことを言っつてその場その場をやり過ごしているけど徐々に限界に近づいてきている。まずいぞ…。

「ちょっとトイレいつてくるよ…」

「腹が痛いのかよ。急がないと俺らのクラス始まっちゃうよ」

「そつちじゃない…。小の方だよ…」

「大でも小でもどつちでもいいよ！！ まあいい…。俺は先に行ってるね」

嘘を言っつてしつこい宮城をわかれさせたけれどもこれからどうやって対処すべきかを考える。

そして何かを思い出す。そうだ…！！ これだ…！！

「似合っているわよね…」

女子トイレの鏡を見て自分の全身の姿を見て堪能する。

赤いリボンに懐かしさを感じる紺のブレザーにこの学校で指定されている長さのスカート。

私は今まで男の子になろうと諦めていたが今のこの姿ならどう見ても懂れていた女子高生よね！

何でこの学校の制服を持っているかって？ 本人の許可なしに勝手にミカの教室に侵入して制服を奪ったのよ。

これ…。見られたら私は確実に犯罪者しな…。まあばれても元々私は変態扱いされているしミカは怒らないだろうけど。

ってか…。今度は女装しても内科検診から逃げられくない…。意味ないじゃん！！と自分に突っ込みたくなった。

私は普通の女性らしくトイレを出て廊下を歩く。

元々、奈々川ユウタとしてこの学校にいる私だけでも、今は女の格好をしているからこの学校にはいない不審な人物なんだよね…。。

それでもすれ違う人達はみんなは気が付いていないから普通の女子高生扱いされているってことよね。

「ふう……。気持ちいい…」

逃げようとした結果、理由はわからないけど外の屋上に上がってフェンスによっかかってゆれるスカートから風の流れるを感じる。

雲一つない澄んだ青空。屋上は死に近い場所だから…。それと一番死にたくないと思える空間でもある。私はそんな深刻な悩みしてないけど。

とりあえず1人になりたくて…。

誰にも見つからないからここでのんびりできると思いリラックスしようとしてひと段落あくびをしながら背伸びをした時、私は誰かを発を見た。

「君も1人なのか？」

「え…え…」

と、赤い短髪の少年が私のことに気が付き、こちらに近づいてきて声を掛けられる。

この人のことは偶々私のクラスの生徒ってことは知っている。話なんかしたことないよ。

でもちよつとだけ気になる人だったからよく印象に残っている。

「小笠原カズマ君よね…。こんなところで何しているの？」

「オレの名前を知っているのか」

名前を突然言われて驚く赤髪の子。知っていたのはユウタのほうであって初対面の女の子に無理やり言われて驚くのも無理はない。カズマ君は1人ぼつちで休み時間も悲しそうに座っているから名前くらいしか知らなかった。

「だっていつも寂しそうだったから見てるよ。表情が暗かったから…」

「…。いつもか…」

私のニコつとした発言攻撃でちよつとだけカズマ君は今まで冷静だったのに頬を赤く顔染めている。

「君、クラスはどこなんだ？…。わざわざうちのクラスまでオレのことを見に来ているのかい？」

「あつ…」

ユウタの時の私が見ているだけで女の方の私はクラスすらないから勘違いを与えてしまった…。発言間違えた…。

「じゃあ、君の名前は何て言うの？」

「私の名前…？」

実際はこの学校に存在しない私だからこの質問はまずいんじゃないかと嫌な予感がする。

「私の名前は、なっ…」

「な？」

どうしても名前を反射反応で言ってしまう。苗字を言ったら絶対変なことになってしまう。

「あつ！間違えた…。私の名前はナナって呼んでいいよ」
「へえー」。ナナちゃんか」

適当なことを言つてごまかそうとしているのだけれども、言葉を言い変え様としたから「自分の名前の癖になんで間違えるんだろっ」と思われているだらうな。

しょうがなかったから私は自分の本名である名前をカズマ君に教える。

「それで？」

「はい…？」

「いや…。オレのことをいつも見ているって言つてたからオレのことどう思っているのかなあ…」

「……。ち、違うわよ…」

別に異性として今まで見ていたわけじゃなくて、内気な性格の私はもつと友達が欲しくてカズマ君を見ていたわけで…。

やっぱり男装と女装を使い分けるのは難しいなあと思つた瞬間であつた。

「ここに来たつてことは君も悩みあるのかい？　だつて今は内科検診やつてるんじゃないか？　サボつたの？」

突如、私が怯えていることを発言して思い出したくないことを思い出して焦りを感じている。

このことはもはや言葉を返せるはずもない。

「オレもさ…。サボつたんだ…」

「えっ…？」

この人も自分と同じくサボつた側の人間であると教えてきた。なぜだ…。その具体的な理由は悩みがあるのかと思つたから、何

で？　つとカズマ君に聞いてみる。

「君を見てると思い出すんだ……。オレが好きだった人と分かれてしまったんだ……。うああああああああああ。思い出したくない！！」

深刻そうな顔をして振られたとか言い出したけど、私は恋愛なんてしたことないから何て返事をすればいいのかわからない。

「やっぱさ……。オレ、死んでもいい側の人間だったんだよ……。このまま死んでもいいかと思えてきた……」

急に泣き顔を見せて、突然死にたいとか言い出したから何て言葉を返せばいいのかわからなかったけど。

長つたらしい会話を泣きべそかきながらだらだらと聞かされてもちろんつまらなかった。

「死にたいのか死にたくないのかはつきりしなさい！！」

「うう……」

「たかが振られただけでしょ！　そんな小さいことで死ぬって情けなさ過ぎるわよ」

「中学校のころから付き合ってたんだよ。2年の関係がオレのせいで崩れて……」

どうでもいいと思っていたのにこの人の泣き顔が少しだけ可哀想と思えてきたからって

何で私は助けようようと声を掛けているのかしら？

「あんた男でしょ!! 女の子に弱いところを見せるなんてかつこ悪いわよ!」

まあいいか…。どうせもうここで会うわけでもないわけだから、今日だけ女性の気分を味わえるってことで乙女らしく青春っぽい台詞を言う。

「私も今は悩みがあるのよね…。悩みがない人間なんてこの世に存在しないから…」

さらに私は髪の毛を風の流れに棚引かせて振り向かせながらウィンクして安心させようとする。

「確かにそうかもな…。こんな可愛い子の前でオレのダサイ姿を見せてもどうしようもないしな…」

「えっ…」

か、可愛いって…。今までそんなこと言われたことがないから今日人生初めて言われてちよっとだけけど嬉しかった。

私がもしこうやって女として居たらこんな青春があったのかなあ…。

「あなたは今、学校をサボっていたってことは暇なんだよね。じゃあ…。気分転換にデュエルしなさい!」

この薄暗い雰囲気を変えるべく偶然ユウタ君のバッグから見えるデュエルディスクが2つ見えたのでここでデュエルをしようと誘いかける。

「デュエルか…。デュエリストである以上、オレは断る必要性はないな。よし！ やろうよ」

「じゃあ…！ 持つてくるの忘れたからデュエルディスクを貸してよ…！」

カズマ君は私の勝手なお願いも素直に答えて鞆からデュエルディスクを取り出して私の方にぽいつと投げる。

「何でデュエルディスク持つてないんだ？ デュエリストなら必須ものを忘れるなんてドジっ子なんだなー」

何でカズマ君は私は何でデュエルディスクを持つてないのか疑問だったらしい…。

私も何で2つのデュエルディスクを持ち歩いているのか疑問だったけれどあえて聞かないでおこう。

たぶんだけど…。そのもう1つのデュエルディスクはピンク色にコーディネートされてたから彼女のものだろうけど。

「う、うるさい…！ 今日は偶々急いでたから忘れちゃったんだ」
「急いでたって何を急いでいたんだよ…。別に急ぐことなんてないだろ」

確かに…。急いでいた理由は先ほどあつたように逃げてからからだっただけ…。

そんなことよりもデュエルだ！ 私はデュエルディスクを大きく広げてデッキをセットして展開させる。

「さあ！ デュエル開始よ…！」

「先行は私から貰うよ。ドローだよ！」

まずは手始めに親切に先行を貰ったからデッキのカードを捲ってドローする。

「私はモンスターをセットしてリバースカードも2枚伏せてターンエンドだよ」

相手は何をしてくるかわからないから守りを固めただけ。前にも言っただと思うけどこれが一番安全なんだよね。

「次はオレのターンだ！ドロー。まず、オレは『ドラグニティ・フアランクス』を墓地に送って『調和の宝札』を発動！ 2枚をドロー……」

カズマ君のターンに変わるとまずは手札を交換してカードを交換して調整する。何を企んでいるんだ…。

「『ドラグニティ・ドウクス』を通常召喚！ 効果によって『フアランクス』を装備する」

棒らしきものを手にした鳥人の男性がフィールドに登場する。このカードは確か、ドラグニティでも中核を持つカード…。

「そして『フランクス』の効果発動！！ 装備カードとなっているこのカードはフィールド上に特殊召喚できる！！ 現れる！！」

装備した2本の角が生えたドラゴンが『ドウクス』から離れて現れる。2体ものモンスターが並んだってことは狙いはやはり…。

「レベル4の『ドラグニティ・ドウクス』にレベル2の『ドラグニティ・フランクス』をチューニング！！」

2体のドラグニティが光に変わって交差して交わろうとする。現れたのは…。

「疾風の竜よ！ 溪谷から姿を現せ！ 現れる！ 『ドラグニティナイト・ガジャルグ』！！」

光の先から出てきたのはドラゴンだか鳥獣族だか判別できないほど大きな羽根を広げたモンスター。

「へー。1ターン目からシンクロ召喚を狙うとは思わなかったわ…」

「褒めている場合じゃないぜ！ 『ガジャルグ』の効果起動！ デッキから『ドラグニティ・ブランディストック』を手札に加えてすぐに墓地に送る！」

『ガジャルグ』は1ターンに1度デッキからドラゴン族か鳥獣族をサーチする代わりに他のドラゴン、鳥獣族を捨てなければならぬカード。

サーチしたカードを手札にキープせずにすぐに捨てたってことは勿体無いことだと思うけど、やってることは『おろかな埋葬』と同じだから問題ないのか…。

「そしてバトルフェイズだ！　オレは『ガジャルグ』でそのモンスターに攻撃しろ！」

『ガジャルグ』は低空で滑空しながら私のセットされたモンスターに飛び掛った。

「やりいー。破壊だぜー！」

表になったのは緑色の髪をしている美少女モンスターが爪に切り裂かれながら苦しそうな顔をして破壊された。

「あなたが破壊したのは『ガスタの巫女　ウインダ』。このカードが破壊された時、デッキからガスタと名のついたチューナーを特殊召喚できる」

「あーあー。可愛いモンスターを倒しちゃったよ。何か申し訳ない気がしてきた…」

「別に謝る必要性なんてないわよ」

私は効果処理としてデッキからこの条件を満たすモンスターを何を出そうかと、デュエルディスクからデッキを取り出す。

カズマ君は破壊される『ウインダ』を見て変な感情を持っているらしいけど、この子の死は無駄ではない。

「『ウインダ』の効果によって『ガスタ・ガルド』を特殊召喚」
「可愛い顔をしてただじゃ死なないのか…。厄介だ」

『ウインダ』のペットでもある緑色の小鳥の名『ガルド』を呼び出す。

この子も破壊されることによってリクルートできるガスタデッキ

のキーカードでもある。

ガスタデッキはこのリクルートする無限の流れで場を維持する戦いが得意だ！

「オレはカードを2枚セットしてターンエンド。どうやら同じ風属性同士の戦いになりそうだ」

私と同様の枚数の守りを固めて次のターンに備えようとするカズマ君。

確かにドラグニティも風属性で統一されているテーマなのよね。偶然にも私のガスタデッキのほうも風属性だからこの勝負は面白くなりそうだね。

ここからが奈々川ユウタが使えない私のもう1つのデッキ、奈々川ナナがガスタの力を見せてあげる！！

ナナ

LP：4000

手札：3枚

場：モンスター

ガスタ・ガルド

魔法・罫

伏せ2枚

カズマ

LP：4000

手札：3枚

場：モンスター

ドラグニティ ガジャルグ

魔法・畏
伏せ2枚

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4494x/>

遊戯王～デュエルキングを目指す少女の物語

2011年11月17日17時47分発行